

# 早稻田學報

大正十年十一月十日發行 第三十一號 十一月十日發行

## 目次

### 意見

年頭の感 總長 侯爵 大隈 重信

### 學說

經濟界の過去、現在、未來 教授 法學博士 田中 穂積

### 校報

定時維持員會——政治經濟學部教授會——高等豫科教授會——學位規程申請——學期試驗——科外講義——冬期休業と授業開始——高等學院の元旦祝賀式——平沼學長と朝鮮總督府教育調査委員囑托——理工學部主任囑任——講師囑任——評議員囑任——柔道師範囑任——德永博士の海外視察——提教授及末高信氏の米國留學——酒井校醫の辭任——田井工手學校主事の辭任——阪田博士逝去——松平伯・杉田駿氏・增田義一氏の特志——在桑港母國觀光團の寄附——中等教員免許狀下附——贊助會報告——圖書館報告

### 校友會報

大阪校友會——新潟市校友會——鐵道稻門會——酒水早稻田會——四十五年會忘年會——大政四十五年會——第六回七赤會——得文會——大阪電燈校友會——芝浦製作所稻門會

### 校友面影

衆議院議員 田淵 豐吉氏

### 校友動靜

政尾藤吉氏選羅公使となる——別府新熊氏——坂崎坦氏の渡佛——三枝忠二氏——判檢事、辯護士登第者——松原九郎氏の逝去——竹藤甚九郎氏の逝去——業務移動——轉居——其他——

### 學生會合

各科聯合懸賞討論會——早稻田内燃機關研究會——支那協會例會——史學會十二月例會——

### 雜錄

元旦名刺交換會——平沼學長の出張講演——伊地知教授・小室教授及高井忠夫氏の送迎會——高田博士主催晚餐會——德永工手學校校長主催晚餐會——市川堅吾氏の逝去——肥塚龍氏の逝去——

大正九年 本會維持費贈出者氏名報告

東京牛込

早稻田大學校友會

電話番三〇〇〇

東京九八八番

意見

年頭の感

總長 侯爵 大隈 重信

活動の後に休養を要することは、科學的に十分説明せられて居ることで、繼續的に活動すれば、必然的に生理的疲勞を生ずる。此の疲勞恢復の手段が休養なのである。休養なるものは、只單に休養の爲めの休養ではなく、次の活動の準備として戰闘力を蓄積する爲めのものである。即休養は舊事業に對する活動の終であると同時に、新事業に對する活動の始めなのである。新年の目出度／＼の數日間の休養も、亦此の意味のものであらねばならぬ。既往一ヶ年間の總決算の祝と、新一ヶ年の戰線への出陣祝とを兼ねたものであるべきである。

こうした次の一戰の戰闘準備の形式が即ち休養なのであるが、兎角その眞の意味を失ひ、所謂形式に陥つてしまつて、種々の弊を醸すのは遺憾に堪へない。休養が單に年中行事の一といふ様な形式的のものになりれば、それが一の仕事となつて休養にはならなくなる。即ち疲勞恢復を妨ぐるの結果を來すのである。新年の休みの如きも、餘りに永きに

互るのは正に此の弊に陥つて居るといへる。且つ休養は遊惰の風を馴致する。又閑居不善を爲すの機會を多からしめ、奢侈淫蕩の傾向を助長し、單に國家の富を浪費するのみならず、道義の敗類を醗酵し易いものである。王朝時代の歴史は尤も雄辯に其實を證明して居る。夫の大宮人等は、優游行樂を事とし、はては男子が女子の風を倣つて眉を描き齒を染め、衣冠束帶、堂々と長劍を負んでは居るが、中身は戰闘の用に堪へぬ一の裝飾物に過ぎぬ。詩歌管絃、長夜の醗を張つて徒らに聲色の美を競つて其の日を送るといふ有様となつてしまつた。其の結果は政權を野武士の手に委するの已むなきに至つたのである。そこで、鎌倉幕府に赴いた彼の大江廣元は、幕府の爲めに律令を作つて天下の統一を圖つた。天下は完全に統一された。其の制度なるものは全く實際的のもので、朝廷に於ける形式的弊害を脱却したものであつたのである。羅馬も建國の當初こそ實際的な堅實性を有つて居たものであつたが、四方を征服して國富み

威揚るといふことになつてからは、矢張遊惰安逸に流れて、終に北狄の蹂躪を支持するに堪へなかつた。東西軌を一にしてゐるではないか。徳川家康は立法的天才であつて、克く三百年の平和の基を定めた程であつたが、それでも三代將軍の時には天草の一揆に痛く悩まされた。少時太平が持續すると、意は驕り、氣は弛んで、直に形式の弊に陥いつて敵手の乘ずるところとなるのである。一旦大任を擔うて施政の局に當つた以上は、たゞ不斷の奮闘的生活あるのみで、正月も凱旋も、さうした形式に拘泥する餘裕はなかるべき筈である。

話は少しく違ふが、形式に拘泥するの弊は、隨所に種々の醜姿を曝露して居る。某大官が引責辭職するといふ。眞かと見るとさうではない。只一時社會の耳目を糊塗する爲めの形式的辭任であつて、やがて復職する爲の豫定行動に過ぎぬ類である。出所進退は特に公明正大ならざるべからざるものだけに、かゝる見戲に類したことを敢てして居る。その他官僚政治の繁文縟禮も形式拘泥の好適例であらう。自他共に煩はされて居ながらも、尙官廳の威信の何のと理窟をつけて改むることをせぬ。先頃東京市會では市長の年俸二萬五千圓と決議したが、是等も官僚式を遺憾なく發揮したものである。帝都の市長を遇する所以とでも考へてのこ

とかは知れぬが、本來市長は名譽職ではないか。昔ならば町奉行で、一の閑職に過ぎぬ。それが而も一國の國務大臣の俸給の二倍を食むとは矛盾して居るといはねばならぬ。かゝる高給を支給することになると、名譽職たる本質を失ふのみならず、後には其の高給を目的に市長の地位を争ふものが續出せぬとも限らぬ。後藤男は恐らく之を辭するであらう。否世人を驚かすを恐れて或形式に於て之れを受くるかも知れぬが、兎に角是も形式の一弊たるは争はれぬ。又多くの會議といふ會議に形式的ならぬものは少なからう。結論は既に議事前少數頭目により、怪しい場所

で定められてあるので、議場は只世間の手前に對し可否を起立に問ふまゝである。國家社會の支柱を喰ひ荒らし、民衆の安寧を脅かし福利を沮み建設を危うする所の白蟻が、何處の會議にも棲息して居るのは嘆息すべきことである。

近頃文部省直轄學校の昇格問題が頗る喧しいが、是れも亦形式憧憬者の運動ではあるまいか。形式よりは内容、肩書よりは實力が貴ばれるべき時勢に、それとは逆行した行動を執るものと見做さねばならぬ。文部省も其處理には随分悩まされて居るやうであるが、先年長くも皇室費より一千萬圓を教育獎勵費にとて御下賜になつた。一千萬圓は皇室費からい

當局はそれを専門教育擴張費に充て増設昇格の計劃を立てたのが抑々今回の運動を誘致した原因なのである。若しも此昇格問題が他の意味をも有つて居るとするならばそれは形式の弊の利用であつて、甚だ畏れ多いともなる譯である。又教育事業そのものも實に形式的である。夫れ故教壇上に忠孝を説き義理を明かにし、人格を論ずること愈々盛んなるにも拘はらず、不忠不孝の徒は跡を絶たぬ。薄志弱行、教育ある悖德者は寧ろ衆きを加ふるの状況にあるではないか。是れ言ふまでもなく形式教育の當然の歸結である。

禮儀も一の形式である。新年の屠蘇も同禮も一の形式で、敢て此禮儀を廢めよと主張するのではないが、時勢は益々複雑となつて行くのであるから、禮儀も之れに適應するやうに簡易にすべきが當然であると信ずるのである。即ち從來の一週日にも互る儀式——休養をば一二日緊縮するといふやうにすべきである。文化の進展と共に殘忍なる競争は愈激烈の度を増すばかりであるから、禮儀の爲めに活力を浪費するの愚に陥らぬやうに心掛けるのが肝要である。西洋崇拜者には、新婚旅行だ何んぞと頻りに新しがるものもある、それを必ずしも悪いとはいはぬ。が、只繁雜なる形式の模倣追従に忙殺されるのは憂れたことではあるまい。宗教には種々な儀式がある。昔佛敎興隆

時代には、何か一の法會には、圓頂繡衣數百人といふ盛大であつた。一家の吉凶事には親戚故舊會するもの數百十人といふ有様であつた。而しこの盛大なる禮儀——極端なる形式の裡に、衰頹の影は益々大きくなつて行つた。中世紀の歐洲も宗教的形式の弊には永い間苦しめられたのであつた。

世界の大勢は刻々進展するものに、内にあつては時事日に非なるものがある。大正十年の日本は中々多難の狀勢に在るんである。徒らに形式の末に拘泥するを廢めて、速に戰國準備を整へねばならぬ。新春の屠蘇も、此難局の戦線への出陣の盃である。この決意があつてこそ新年お芽出度にも十分の意味がある。ゆる。

### 學說

## 經濟界の過去、現在、未來

教授 法學博士 田中穗積

今更ら繰返すも所謂死兒の齡を數ふるの痴に類するが、世界大戰を通じて我邦政府當局者の無爲無策にして毫も形勢の推移に鑑み機宜の處置を講ずるの勇斷なく、經濟界未曾有の變局に遭遇し漫然袖手して大勢の趨く所に放任せるのみならず、却て積極政策と稱して輸出貿易の増進、企業の發展を歓迎し、民間の銀行家及商工業者も亦舉て此大勢に支配せられ、輕舉盲動其態度の極めて不謹慎なりしことは、返すくも誠に残念の至りであつて、歐米の交戰國にあつては官民の協力一致に依つて、金利を按排し、或は商品の價格を公定し、或は暴利取締令を厲行し、有ゆる手段を講じて投機熱の勃興を抑制す

ることを怠らなかつたに反し、我邦に於ては官民舉つて寧ろ投機熱の勃興を煽揚するの愚に陥つた、即ち大戰の爆發以來通貨は次第に増加の傾きを呈し、開戰前に於ける兌換券の發行高三億三千萬圓は、大正六年六月に至りては六億圓即ち殆んど二倍に膨張するに至つたから、必然の結果として物價も亦戰前に比較して約五割の暴騰を見るに至つた、そこで同年夏の臨時議會に於ては既に物價調節に關する質問が提出せられたに拘はらず、當時寺内内閣の當局者は名を調査に藉り全然之を放任して顧みなかつたのみならず、其後通貨は益々膨張し、翌大正七年の下半季に至つて兌換券の發行高は遂に戰前の

三倍に達すると云ふ有様であつたから、物價も亦更らに一歩を進めて二倍以上に暴騰するに至つた。而して此際寺内内閣が倒れて現内閣が成立し、愈々猪突暴進的の積極政策が鼓吹せらるゝに至つたのは、誠に國民の不幸と云ふべきであつて、現内閣の成立以後兌換券の膨張は愈々著しく、大正七年末には十一億四千四百萬圓となり、更らに大正八年末には十五億五千五百萬圓と云が如く、殆んど底止する所を知らざる勢を以て日に月に膨張したから、物價も亦同一の歩調を以て暴騰を續け、從來我邦の物價は幸に英國や米國に比較すれば其騰貴の勢は緩慢であつたが、現内閣の成立以後兌換券の膨張が急激なるに及んで、物價の暴騰頓に著しく、遂に大正八年六月に至り我邦の物價は世界物價の平準を突破し、米國よりも英國よりも遙かに急激となり、同年末の物價は之れを戰前に比較すれば三倍の暴騰を見るに至つた。

斯の如く物價は世界の平準を突破し、我邦の歴史あつて以來未曾有の大暴騰を呈したから、必然の結果として企業熱を愈が上にも煽揚したの蓋怪む勿れのことであつて、最近數年間に於ける各種の企業の新設擴張計畫につき日本銀行の調査に依れば左表に示すが如き驚く可き巨額に達した。企業計畫資本高

然らざるも既に險惡なる市場に對して神經過敏となれる銀行家に一大鐵槌を加へ、預金の減少手元の逼迫に恐怖を懐ける際、資金の需要は滔々として殺到し來れるが故に遂に貸出拒絶の外他に擇ぶべき途なき窮境に陥つた、即ち大正九年春爆發せる我が經濟界の激變は決して突發的に起つたものでなく、數年來次第々々に醗酵せる投機熱が其極度に達した必然の結果として、正さに爆發すべくして爆發したのであるから、一時的のパンニックにあらずして、當然期待されたクライシスたるとは、以上絮說せる平明たる事實に徴して毫も疑を容るゝの餘地なき所である、然るに無謀なる積極政策空疎なる樂天觀を鼓吹せる政府の當局者は、事茲に及んで猶ほ且つ一時的のパンニックに過ぎずと強辯し、而して形勢日に非にしてクライシスたる事實の遂に掩ふべからざるに至るや、罪を悉く當業者に嫁し其輕舉盲動之れを然らしめたりと誣ゆるに至つては、之れを批評するの辭なきに苦まざるを得ない。

遮莫既に我邦の經濟界が不幸にして恐慌の渦中に投じた以上、其責任が何人にあるを問はず一日も之を放任する事が出来ぬ、元來恐慌の救濟法には自力主義と他力主義とある、自力主義とは即ち當業者聯合の力に依るものであつて、最も健全妥當なる救濟方法であるが、恐慌の破壊力

猛烈にして自力主義のみに依つて之れを防遏すること能はざる場合に於ては、勿論他力主義即ち政府の力に俟たねばならぬ、現に這般の恐慌に當り政府が救済の爲めに貸出せる金額は、砂糖、棉絲、生絲、銀行其他に對し預金部並びに特殊銀行より支出せる總額三億圓以上に達したと云ふが如きは、事情洵に己むを得ざるものと認めざるを得ない、併しながら斯の如き一時的の救済策以外に、吾輩は這般の恐慌に遭遇して我邦經濟界の健全なる發達の爲めに、茲に當業者の三度び思を致さんことを切望する二つの提案がある、其第一は企業聯合の促進であつて、第二は銀行界の刷新である。

即ち第一の企業聯合は經濟界の大勢であつて、既に我邦に於ても其實現を見つ、あるが、一日も早く今日の悲況を脱して一陽來復の期を迎ふるが爲めにも、將た又經濟界永遠の計としても吾輩は企業聯合の勢を促進する必要ありと信ずる、抑も獨逸の商工業が十九世紀の末から二十世紀の初に互つて長足の進歩を爲し、世界到る所の市場に於て英國の壘を摩し或は之れを壓倒して覇を唱へんとするに至つた、其秘訣は素より一にして足らないが、企業の聯合即ちカルテルの組織が獨逸商工業の刮目すべき大飛躍を爲せる重なる原因たることは、英獨識者の共に認めて異論なき所であつて、英國の如く小

企業家の多數なる場合に於ては、生産者自身が直接に其生産せる商品を海外市場に販賣すること能はずして是非とも商人即ち輸出業者の手を煩はざるを得ない、從て輸出業者の懐に入る利益だけは少くとも商品の價を高くするのみならず、生産者は直接に市場の状況を詳かにせず僅かに輸出業者を通して市場の有様を窺へ知るに過ぎないから、販路の盛衰に應じて事業を伸縮するに當り自から敏活を缺く憾もあり、又一般需要者の嗜好に従ひ之れに適合する商品を生産すると云ふ便宜もない、然るに獨逸に於けるが如く企業の聯合行はれ、販賣協定の結果運賃を減じ、或は原料の購入を共同となし、或は研究所の設備を共同となし、或は生産品の販賣を協同にするに於ては、當然生産費を減じ商品は比較的低廉に之れを販賣し得るのみならず、商人の手を經由せず生産者自から直接に内外の市場に之れを販賣するから、商人の利益となる部分だけ更に其價を引き下すことを得べく、又市場の状況に順應して事業を伸縮すること、一般消費者の嗜好に従つて商品の改良を計ることも極めて容易である、從てカルテルの組織が獨逸商工業の勃興を促進せる有力なる武器となれるは毫も怪むに足らざる所であつて、一八七九年の關稅改正以後經濟界の不況に陥る毎に、その挽回策として獨逸の當業者は次第にカル

テルの組織を擴張し、殊に一九〇〇年の恐慌は之れが發達に一大刺戟を與へ、一九〇五年政府が帝國議會に提出した報告によれば、カルテルの現在數三百八十五にして其中に包括せらる、企業の数實に一萬二千の多きに達し、而して販賣を共同にするカルテルの數のみでも二百の多きに上つたが、獨逸の當業者が不景氣の場合に處する自衛策として採用した所此方法は、須らく移して以て我邦にも之れを採用すべしであつて、今日の悲境を脱する第一の急務は即ち輸出の獎勵であるが、輸出の増進が最も有効である。

第二に當業者の猛省を請はざるべからざる問題は銀行界の刷新であつて、我邦國民經濟の健全なる發達の爲めには、國民經濟の中樞をなして居る所の銀行界の刷新が何ものよりも急務である、即ち銀行は之れを人體に譬ふれば、動脈にも當るべき大切なものであるが、此大切な動脈が我邦に於ては硬化症に罹つて脆弱となり動もすれば破裂の危険がある、現に這般の恐慌に於ても銀行の破綻は都鄙共に續出したが、我邦銀行界の根本的弊弊は、銀行家が同時に他の事業を兼營すること、顧客に對して同時に多數の銀行と取引することとを許すと云ふ此二點である。

即ち信用の媒介機關たる銀行は云ふまでもなく一般の人氣を基礎として營業するものであるから、銀行家としては苟くも人氣に障はり其信用を傷けるやうなことは絶対に之れを慎むべきであつて、若し一朝其信用は忽ち取附の災厄に遭遇せざるを得ない、故に細心なる銀行家は斷じて他の事業の兼營を避け、飽迄も銀行の信用を擁護することに其全力を傾注するのであつて、堅實なる英國の實業界にあつては、銀行家にして他の事業を兼營するが如きは不謹慎の甚しきものとして一般に排斥せらるゝに拘はらず、我邦に於ては幾多の事業に關係する企業家が其の事業の資本を得るの手段として銀行を兼營するが如き弊風が廣ろく行はれて居る、現に彼の七十四銀行の例によれば、拂込資金は三百萬圓であつて、借入金一千三百萬圓預金六千萬圓に對して貸附金は七千萬圓に上り、而して其貸附金の半額以上は頭取自身の個人事業若くは其合名事業の方面に融通されて居つたと云ふが如きは沙汰の限りであるが、實業界の氣風が事業家の銀行兼營を排斥し、斯の如き銀行に對しては何人も斷じて預金をせぬやうにならなければ、銀行は其基礎未だ鞏固なりと云ふことが出來ぬ。

而して又我邦の銀行は其顧客が同時に多數の銀行と取引しつ、あるのを默過して少しも之れを怪まないが是れは頗る不思議な現象と云はざるを得ない、何となれば斯の如き状態にあつては銀行は其融通した資金が顧客によつて如何なる方面に利用せられて居るかと云ふことは勿論知り得る道がないから、市場の状態に順應して金融上手加減を加ふる能はず全く暗中摸索の愚に陥るを免れぬ。此れに就て高橋藏相は最近東京銀行家の集會に於て警告を與へて曰はく「今日一般銀行の經營方針ニ就テ遺憾トスル點方頗ル多イ、一例ヲ舉グレバ銀行家ハ貸出ニ當ツテ取引先ガ其資金ヲ如何ナル目的ニ使用セルヤヲ願ズ、單ニ擔保ノ確實ニシテ重キヲ置クガ爲メ、巨額ノ資金ハ投機思想ノ目的ニ流用セラレ、遂ニ今日ノ如キ行詰リヲ生ズルニ至ツタノデアツテ、斯ノ如クンバ銀行ハ質屋營業ト何等ノ擇所ガナイ」とまで極言したが、平生藏相の意見に兎角同意を表し難き吾輩も、此説には至極同感であつて、銀行が質屋營業と何等の擇所なく單に擔保の確實にのみ重きを置き、銀行と其取引先との間に眞正なる聯絡の存せざる所以のもの、畢竟銀行が其顧客に對して同時に多數の銀行と取引することを許すに職由せざるを得ない、即ち一人の企業家が同時に多數の銀行と取引を開くに於ては、孰れの銀行も到底其企業家の内幕を詳かにせず、融通せる資金の投資先などは勿論不明であるから、勢ひ姑息の方法とは知りながら、己むを得ず確實なる擔保品

を得ない、何となれば斯の如き状態にあつては銀行は其融通した資金が顧客によつて如何なる方面に利用せられて居るかと云ふことは勿論知り得る道がないから、市場の状態に順應して金融上手加減を加ふる能はず全く暗中摸索の愚に陥るを免れぬ。此れに就て高橋藏相は最近東京銀行家の集會に於て警告を與へて曰はく「今日一般銀行の經營方針ニ就テ遺憾トスル點方頗ル多イ、一例ヲ舉グレバ銀行家ハ貸出ニ當ツテ取引先ガ其資金ヲ如何ナル目的ニ使用セルヤヲ願ズ、單ニ擔保ノ確實ニシテ重キヲ置クガ爲メ、巨額ノ資金ハ投機思想ノ目的ニ流用セラレ、遂ニ今日ノ如キ行詰リヲ生ズルニ至ツタノデアツテ、斯ノ如クンバ銀行ハ質屋營業ト何等ノ擇所ガナイ」とまで極言したが、平生藏相の意見に兎角同意を表し難き吾輩も、此説には至極同感であつて、銀行が質屋營業と何等の擇所なく單に擔保の確實にのみ重きを置き、銀行と其取引先との間に眞正なる聯絡の存せざる所以のもの、畢竟銀行が其顧客に對して同時に多數の銀行と取引することを許すに職由せざるを得ない、即ち一人の企業家が同時に多數の銀行と取引を開くに於ては、孰れの銀行も到底其企業家の内幕を詳かにせず、融通せる資金の投資先などは勿論不明であるから、勢ひ姑息の方法とは知りながら、己むを得ず確實なる擔保品

を孤柱と頼んで自衛の策を講ずると云ふより外に途がない、従て我邦の金融界は依然として羸弱幼稚の域を脱し得ないのであつて、之れを英國に於ける銀行と其取引先との間に見るが如き、真正合理的の聯絡と比較しては到底日を同うして談ることが出来ぬ。

要するに銀行も亦他の營利事業と同じく、個人が營利の目的を以て起せる一種の企業ではあるが、一般公衆の信用を基礎として營業し、國民經濟上動脈にも匹敵すべき中樞機關であるから、是れが經營者は常に公共の利益を保護増進する重大なる責任を荷ふことを忘れてはならぬのであつて、従つて其態度は飽迄も慎重堅實ならざるべからざるに拘はらず、以上述べたるが如き弊風の一部に我が銀行界に瀰漫しつゝ、あるのは深く遺憾とする所であつて、苦き經驗を細さに嘗めた自今以後どうか此弊風の一洗に努力せんことを切望して止まざるものである。

而して更に進んで我が經濟界の將來如何を觀測するに、恐慌の爆發と共に襲ひ來つた重疊たる大波瀾も時日の経過と共に最近に至つては漸く鎮靜に歸する傾向がある、即ち先づ株式界に就て之を觀るに大正九年の十月初めにあつては、同年六月中旬の安値以上に暴落したものが續出して一時極度に悲觀されたが、時の力は自から過剩株の消化に對して相

當の效果があつて、相場は次第に確かりとして來た、又全國在庫品の價格は前にも述べた如く、恐慌爆發の當時約十億圓に上り、更に五月末には十二億六千四百萬圓と云ふ巨額に達したが、十月末には再び十億圓に降つたから、今後尙ほ三四億圓を減するならば滯貨に原因する市場の壓迫は一掃せらるゝに相違ない、而して之れと同時に物價も亦大正九年三月の指數四二五より、十月には二九八となり、更に十一月には二九二となり、約三割以上の激落を呈して大正八年六月頃の狀態に戻つたのは特に注目すべき現象であつて之れを近年各國に行はれた恐慌前後の物價と比較しても、随分著しい下落を呈したものと認めざるを得ない

即ち一九〇〇年獨逸に爆發した恐慌當時物價の下落は約一割内外に止まり、又一九〇七年米國に爆發した恐慌當時に於ても物價の下落は一割四分に止まり、日露戰後即ち明治四十年我邦の恐慌當時に於ても其低落歩合は約一割五分に過ぎなかつた、然るに這般の恐慌に於ては既に物價の低落歩合三割以上に達したと云ふことは頗る珍らしい現象であつて、畢竟過去の暴騰が著しかつたに反して、動も亦急激なりしものと認めざるを得ない、世人動もすれば日露戰後勃興せる事業熱と此度の世界大戰に當つて勃興した事業熱とは其規模に於て著しき相違があるから、従て其反

動に於ても日を同うして談る可からずと論ずるものがあるが、是れは一概に斯く輕斷することが出来ぬ、何となれば單に明治三十九年の事業計畫約十億圓を以て、是れを大正八年の事業計畫約四十億圓に比較すれば其規模は僅かに四分の一にしか當らないが、日露戰爭當時に於ける我邦の經濟界は未だ、頗る幼稚のものであつて、明治三十八年の交會社拂込資本金は漸く十億圓に達し得なかつた時に當つて、翌年には新たに十億圓の事業計畫が行はれた、然るに今回の事業熱勃興當時に於ては我邦の經濟界も既に著しき發達を爲し、大正七年末の會社拂込資本金は僅に四十億圓に達し、而して其翌大正八年の事業計畫が四十億圓に上つたのであるから、其熱度の猛烈なりし點に於ては彼是必しも著しき徑庭なかつたと云ひ得るのであつて、従て前回の恐慌當時に於ては物價は明治四十年の十月から下落に向つて、翌四十年十一月底を以て、に至るまで約一年其間の低落歩合一割五分に過ぎざりしに對し、此度は四月より十一月に至る僅々七ヶ月間の低落歩合既に三割以上に達したのは、何ともしても急激なる暴落と云はざるを得ない。

即ち此度の物價下落は中々急激であつたが、而かも過去の暴騰が頗る猛烈であつたから、是れを戰前に比較すれば尙ほ且つ十三割の騰貴に當つて居る、故に將來とても物價はまだ、多少の下落を見るに相違ないが、併しながら恐らく今日以後の下落は輕微であつて、物價の落附く所は大凡そ戰前の二倍位の所ではあるまいかと思はる。

然らば何を以て斯の如く推斷するかと云ふに、戰後各國の通貨は驚くべき膨張を爲し、是れは容易に收縮すべき見込なきのみならず、同時に各國の公債も銀行預金も共に急激なる増加を爲し、此等は勿論通貨ではないが稍々流通緩慢なる通貨と同一の影響を物價に及ぼすのであつて、更に他の一面を顧れば戰後各國の財政は驚く可き膨張を爲し、是れを支ゆるが爲めに通貨の收縮の如きは容易に斷行する餘裕もなく、又勞働問題の自熱し來りて動もすれば國家の基礎すら是れが爲めに動搖せんとする危険ある今日、勞銀の低落を促す通貨の收縮は事頗る至難なるを免れぬ。

即ち曩きにエドガー、クラモンドは倫敦銀行協會の席上に於て物價の前途に關し其低落は極めて緩慢なるべきを豫言して、其理由として(一)紙幣流通額の莫大なる(二)各交戰國に於ける公債の大増加(三)勞銀を維持し生活程度を向上せんとする勞働者の大運動の三つを列擧して居る又紐育ナショナル、シチー、バンクのアウステン等の如きも、物價騰貴の原因は(一)戰爭に胚胎する物資の需要

激増供給減退(二)勞銀の騰貴(三)通貨の膨張の三つであると論じ、更に物價の前途を豫想するに第一の物資の缺乏は容易に恢復すべき見込なく、交戰國の疲弊、製品貯藏高の缺乏、原料品の不足、運輸及び取引の上に行はるゝ現在の制限解除には相當に長き時日を要すべく、第二に勞銀の騰貴は畢竟物價騰貴の結果であるから、物價にして低落せざる限り勞銀のみ獨り低落す可き所以なく、第三の通貨收縮は頗る至難であるから、物價の前途は今後多少の動搖はあるが容易に低落しないと推斷を下して居るのは洵に肯綮に當れる所説と認めざるを得ない。

現に戰前世界の重なる十五ヶ國の紙幣發行高百六十億圓であつたものが戰爭終了の際に於ては、露西亞の過激派政府の濫發せるものを除外するも、實に八百八十億圓に達して正さに五倍半の膨張に當り、又同じく世界の重なる十五ヶ國の銀行預金は戰前の五百億圓より、戰爭終局の際に於ては一千五百億圓に達して正さに三倍に膨張し、同時に世界各國の公債總額は戰前の八百億圓より戰後には四千四百億圓に達して五倍半の膨張に當れるのみならず、戰後各國財政の膨張又驚く可く、平和第一年に於ける英國政府の豫算は戰前の六倍に見積られ、佛蘭西、伊太利、米國の豫算は戰前の約四倍であつて我邦の豫算すら尙ほ且つ戰前の二倍

五

に當り、世界の租稅總額は戰前の二百五十億圓より、戰後に於ては實に一千億圓即ち四倍に達して居るが、斯の如き事情の下に於て通貨の收縮の容易に企及す可からざるは論を俟たずして知るべしである。

即ち既に通貨にして容易に收縮す可からずとすれば、物價の低落の容易に行はれざるも亦自明の理であつて、恐慌の爆發以來三割以上の下落が既に著しき激落であつたから、今日以後の下落は最早輕微なるべく、物價の落附く所は大凡を戰前の二倍位の所ではあるまいかと推斷したのは、必しも架空の輕斷にあらずと信するるのである、即ち以上の推測にし

て幸に大過なしとすれば、經濟界の前途は今後相當の整理期間を経て、大正十年下半年にも至らば其歩調は極めて緩慢ではあらうが次第に恢復の緒に就く可しと豫測せらるるのである、尤も市場景氣の浮沈は云ふ迄もなく海外市場の狀況に動かさる、ことが多から、冀くは海外の市場も亦平穩に經過して此豫測の適中し、一日も早く一陽來復の期を迎へんとを切望して止まざると同時に、吾輩は我邦經濟界の健全なる發達の爲めに、企業聯合の促進と、銀行界の刷新に就て切に當業者の猛省を促さざるを得ない。(九一—二一〇)

校報

維持員會

十二月八日 定時維持員會を開く。當日の出席者は

- 高田。坪内。市島。渡邊。金子。
  - 中島。浦邊。松平伯。増田。宮田。
  - 平沼。淺野。鹽澤。田中。
- の各維持員なりき。

政治經濟學部教授會

十二月十七日午後三時より 政治經濟學部教授會を開き、専門部經濟科卒業生の大學部入學に關する件等につき協議せり。

高等學科教授會

十二月十三日午後三時より、高等學科教授會を開き、試験に關する件等につき協議す。

學位規程申請

かねて數回の審議を遂げて成案を得たる本大學學位規程は、去る十二月十三日を以つて、其の筋に對し認可申請の手續を了したり。

學期試驗

十二月廿二日より同二十四日迄、専門部商科第一學年 第二學期試驗を施行す。

冬季休業と授業開始

十二月二十五日より翌一月八日迄 冬期休業。同十日より授業を開始す。高等學院に於ては、十二月二十五日より一月七日まで冬期休業、八日より授業を開始す。

科外講義

十二月八日午後三時より、講堂に於て教授伊地知純正氏の「戰前及戰後の歐米」と題する科外講義ありた

高等學院の一月元旦祝賀式

高等學院に於ては、一月一日、講堂に學生一同を集めて元旦祝賀式を舉行す。

平沼學長朝鮮總督府教育調査委員を囑托せらる

今回朝鮮總督府教育調査委員會を設けられたるに付き、平沼學長は、十二月廿六日付を以つて該委員を囑托せらる。

理工學部學科主任囑任

教授 工學博士 沖 巖氏  
右松本教授の理工學部機械工學科主任心得を解き、沖教授に該學科主任を囑任す。

講師囑任

教授 能村 千別氏  
右探工治金學科學科主任德永教授今回學術取調の爲め渡歐せる、に付き、能村教授に該學科主任を囑任す。

評議囑任

理學士 野村 正雄氏  
右講師囑任 地質及礦床學擔任

茨城縣 渡邊惣衛門氏 立以來十二年間、克く德永校長を助けて同校の爲めに盡瘁今日に至りし會の議を経て本大學評議員を囑任せり。

柔道師範と高橋數良氏

今回本大學柔道部師範として警視廳柔道師範高橋數良氏を聘せり。

德永教授の海外視察

校友松平伯爵の特技に基き、教授、工手學校長德永博士は、學術取調の爲め本大學より歐米各國へ派遣せらる、こと、なれり。

堤教授の米國留學

教授堤秀夫氏(電氣)は、校友増田義一氏の特別寄附に基き、本大學より海外留學生として派遣せらる、こと、なり、一月廿四日出發の豫定。

末高信氏の米國留學

校友杉田駿氏の特別寄附に基き、今回末高信氏(4高)を海外留學生として本大學より派遣すること、なれり。氏の研究科目は保險及經濟史にして、向二ヶ年間米國ペンシルバニア大學に留學の豫定。因に氏は一月十七日解纜の伏見丸にて渡米の途に上る筈なり。

校醫辭任

醫學士 酒井 谷平氏  
右本大學校醫たりし酒井氏は、學術研究の爲め渡歐せらる、に因り辭任せり。

田井工手學校主事辭任

工手學校主事田井善道氏今回都合によりて辭任せり。氏は工手學校創

立以來十二年間、克く德永校長を助けて同校の爲めに盡瘁今日に至りし會の議を経て本大學評議員を囑任せり。尚氏の後任として、片山贊助會主事臨時に其の事務を執ること、なれり。

理工學部商議員阪田博士逝去

本大學理工學部商議員 工學博士阪田貞一氏には、客年九月中旬寒冒に罹り、一時小康を得て千葉縣津田沼の別墅に靜養中たりしが、公務の多忙は久しく其の安靜を容さず、再上京せしに病急に革まり、十二月二日遂に逝去せらる。

博士は明治十三年東京大學機械工學科の出、卒業後直に印刷局機械部技手となる。二十年工科大學助教より、東京職工學校教諭となり、廿三年七月機械工學研究の爲め二ヶ年間獨・佛・白・英・米の諸國に留學。歸朝後東京工業學校教授となり、三十二年同校校長に任ぜられ、三十二年工學博士の學法を授けらる。四十二年七月本大學理工科長に囑任せられより以來、今日に至るまで本大學が直接間接に受けたる恩恵は勝てて數ふべからず。  
大正五年九月手島氏の後を襲ぎて東京高等工業學校校長兼教授となり、正四位に叙せらる。九年八月高等官一等に陞叙、十二月一日從三位に叙せらる。  
十二月四日午前十時青山齋場に於

上葬儀を執行す。胡野の名士會葬するもの數百、本大學よりは平沼學長學校を代表して式に列し、左記弔詞を朗讀せり。

弔 辭

嗚呼工學ノ泰斗阪田博士薨去ス其ノ深粹精選ナル學識ト其ノ親切懇款ナル教導トハ復々接スヘカラス誰方痛哭ヒサラン博士ノ朝野ニ於ケル功德ハ天下皆知ル所ナリ何ゾ觀感ヲ須タン  
吾早稻田大學ハ特ニ多ク博士ノ誘掖指導ヲ受ケタリ明治四十一年十月ヨリ大正六年七月ニ至ル十年間ニ於テ維持員教授會議員理工科々長理工學部機械工



故工學博士 坂田貞一氏

●松平伯爵・杉田駿氏・増田義一氏の特志

△校友杉田駿氏は、客年末留學の途に着きし高井忠夫氏の留學費を寄附せられたりしが、今回更に又末高信氏の留學費金額を寄附せられた

△校友増田義一氏は、理工學部の留學費として、金四千圓を寄附せらる。  
△校友松平伯爵は、工手學校長留學費の補助として、金四千圓を寄附せらる。

學科顧問理工科商議員評議員等ノ重要ナル任務ヲ煩ハシ其ノ親切懇款ナル指導ト其ノ深粹精選ナル學識トヲ以テ吾早稻田大學ノ進展向上ヲ啓沃贊助セラレタリ是レ吾大學ノ永久ニ感銘スル所ナリ  
呼博士一タヒ學界ヲ去ツテ九天ニ登仙スト雖モ其ノ精靈ハ必ラスヤ國家ヲ愛護シ吾早稻田大學ニモ冥冥ノ輔翼ヲ垂レンカ  
聿ニ靈柩ヲ拜シ肅ンテ景仰ノ衷情ヲ陳ブ  
大正九年十二月四日  
早稻田大學學長法學博士平沼淑郎

●在桑港母國觀光團の寄附

在桑港母國觀光團は、舊臘大隈總長邸を訪問、其の際本大學基金として金壹百圓を寄附せられたり。

●中等教員免許狀下附

昨年八月廿四日付を以て、大正九年度大學部文學部各學科得業生卅八名に係る中等教員免許出願の處、同十二月廿三日付を以て、左記卅一名に對し同免許狀下附せられたり。  
大學部文學部哲學科

- 五十嵐直行 西村實 瀧藤準教 中島道貫 增田智雄 古川壽夫 小林本功 河野八郎 江川銀藏 天滿信二 荒谷顯光 平田義雄
- 同 英文學科  
濱田眞一 柏木千秋 米澤元康 吉村毅四郎 田口定男 橘瑞寶 辻村誠之 長野綱夫

贊助會規則

- 第一章 總則  
第一條 本會ハ早稻田大學贊助會ト稱ス  
第二條 本會ハ早稻田大學經常費ノ補充ヲ計ルヲ目的トス  
第三條 本會ハ本部ヲ早稻田大學内ニ置ク  
第二章 會員  
第四條 男女ヲ問ハズ本會ノ趣旨ヲ贊成シ一定ノ出金額ヲ齎スル者ヲ本會々員トス  
第五條 本會ノ齎金ハ毎年金拾貳圓ヅツ十ヶ年拂込ヲ以テ一口ト定ム  
第六條 會員ハ一人ニテ齎金幾口ニテモ引受クルコトヲ得  
第三章 委員會、委員及幹事  
同 史學及社會學科  
內田卓一郎 山崎文之助 酒井源一 木村雄六 北村俊平 香川順孝 長船威憲 藤井眞保 三田祐一 下松桂馬 森崎庫次

- 第七條 本會ノ會務ヲ統理スルガ爲メ委員長一名ヲ置キ早稻田大學理事ヲ以テ之ニ充ツ  
第八條 本會ノ事務ヲ補翼スルガ爲メニ委員若干名ヲ置ク  
第九條 委員ハ早稻田大學總長及學長之ヲ囑託シ其任期ヲ三ヶ年トス  
第十條 本會ハ會員募集事務ニ當テシムルガ爲メ本部ニ幹事及主事ヲ置ク  
第四章 會計  
第十一條 本會ノ資金ハ早稻田大學基金管理委員之ヲ管理ス  
第十二條 本會ハ早稻田大學會計監督之ヲ檢査ス  
第十三條 本會ノ會計ハ早稻田大學學報ニ依リ之ヲ報告ス  
齎金の拂込に就て  
拂込の時期毎年一回(御指定の月)又は二回(例へば七月又十二月)とするも差支無之御指定に従ふものとす  
拂込の方法 本會の原則としては集金郵便の方法に據るも御指定あらば振替貯金又は其他の方法にても差支無之ものとす  
贊助會報告  
贊助會申込報名 (第十八回)  
●印ヲ附シタルハ校友ニ非ズシテ特志贊同セラレタル諸氏ナリ



- 村島 歸之 小林房之助
- 岡谷喜三郎 平木 洵平
- 長岡 重松 福島武之助
- 早瀬太郎三郎 中山 豐三
- 吉富静三郎 本野 博章
- 黒澤 昇治 大和藤兵衛

(出席者) (次第不順)

- 山内榮次郎 大村 清 岡谷喜三郎
- 生駒吉之助 淺本 徳三 佐々木文作
- 生駒勘左工門 近藤 祐吉 福島武之助
- 石原善三郎 本野 博章 草皆 久治
- 岸本市太郎 中井 準太 鈴木 茂雄
- 柳下 實 伊藤 孫作 岡崎 誠一
- 北川龜三郎 生谷彌太郎 更井 秀臣
- 西尾 謙吉 星宮 五朗 森 辨治郎
- 中川鉄三郎 楠 五郎 富士田三郎
- 井上 静一 伊藤 基明 吉永 羊平
- 於勢 升 久瀧延太郎 小林儀三郎
- 高山 圭三 齋藤 捨藏 谷 市之助
- 西久保 宏 星野 寅次由名孝太郎
- 藤田 若水 片谷 忠吉 井上 成意
- 荳谷瀧三郎 小林房之助 根來 隆三
- 吉富静三郎 岸 節三 坪井 秀垣
- 中橋彌三郎 武内 作平 淺見 陽一
- 六角宇太郎 森脇 毅 菅原榮次郎
- 芝原寅之助 園生湖太郎 横山 包隆
- 和泉 榮 遠藤喜太郎 宮本 源治
- 黒澤 昇治 小寺 辰吉 大木竹二郎

●新潟市校友會

十二月十二日午後六時、鍋茶屋に於て忘年會を催した。當日は縣會の開期中なりしを以て縣會議員中の出席者もあつて常々の校友會とは幾分其顔觸れを異にした。舟崎幹事の挨拶があつて酒宴に移つた。集まれる

校友は何れも一騎當千の紳士であり而かも會合の目的は忘年會と云ふのであるから、當初より不言の間既に満を持して放たざるの概があつた。果せるかな談論風發氣焰萬丈の勢を示したのである。我校友諸君の元氣旺盛なる事は邦家の爲め大に祝すべき事ではあるが、當夜高調せし氣勢を閉會時迄に之を緩和せしめ得ざりし事を聊か遺憾とするのであつた。斯くて歡樂の裡に閉會せしは午後九時であつた。(舟崎生)

出席者如左

- 松井郡治。松木弘。高野宏策。中村又七郎。廣本賢齋。石塚三郎。荒川謙二。阿部邦太郎。高橋銳二。川上法勳。清水修策。今川幸吉。石澤正雄。小松原謙三。小出喜八郎。上村春馬。笹川加津恵。齋藤庫四郎。舟崎仁一。

●鐵道稻門會大會

鐵道省に勤務する在京の校友を以て組織せる我が鐵道稻門會は、逐年盛大に赴き、今や正に會員二百有餘名を擁するに至れり。毎年春秋の二期大會を催し、會員各自の意見を交換し、懇親和同を圖るを以て例となす。乃ち十二月十日午後五時、神田としばに於て秋期大會を擧ぐ。當日積雪尚ほ深く、早寒殊の外厳し。而かも四時を過ぐる頃より參會者陸續臻りて歡談旺に興り、已でに一脈の早稻田スピリットと校友的温情と相

融合して屋内の雰圍氣中に漲り溢れ、窓外の冷氣を壓殺するの感ありしめたり。

定刻幹事の開會の辭に次で、影近清毅氏本會の沿革と方針とに關して簡單に述ぶる所あり、夫れより醴を聞き、互に遺憾なく胸襟を披いて盛に談じ自由に論じ、華かに笑ひ、大に食ひ、頻りに杯を重ねて時の進むを知らず。聽て自己紹介に移るや、感興更に湧いて倍々生彩を添ふ。宴酣なるに及び熱狂せる一同は期せずして高らかに『都の西北……』を歌ふ。一唱復た一唱。遠く街路に當りて之れに和する者もあり、轉た母校の隆昌を偲ばしめ快欣の情禁する能はざるものありき。かくて一坐和氣霧々裡に散會を宣したるは九時。當夕の出席者氏名左記の如し。

- 柴田 紋吉 丸山 熊八 遠藤 周藏
- 横山 勇 土岐 竹雄 中島 啓藏
- 高津 勇三 安藏吉次郎 岡野 正男
- 坂井 七次 芥 源 新谷 贊
- 中田 龜吉 不破 元治 木村 勇
- 朝比奈九郎 福井 庄七 山田 義一
- 木下 忠六 眞船英之助 白岩甚右衛門
- 矢田部健次郎 松原 一樹 中澤 義隆
- 森崎 六雄 星 虎雄 吉川 慎一
- 土山 三郎 工藤 彰 内野 茂雄
- 森田 正亮 高橋 章正 佐野 頼直
- 加藤 秋 安西計太郎 佐藤 晶
- 加藤 康 清水 一夫 竹内 茂
- 安岡 一夫 芳村 龜松 小平 米雄
- 名越 國吉 影近 清毅 安達 和雄

●泗水早稻田會

東都は既に初雪ありたりとか、此地も朔風俄に嚴敷、一氣に寒來の深きを覺ゆる十二月九日、松茂樓上本店に於て恒例の如く本會忘年會を開く。來り會するもの十二名、殊に新會員としては不動貯蓄銀行新任支店長小安氏及商業學校永井、宇佐美の兩氏を加へて漸次會の新發展を見來るは吾人の欣幸とする所なり。開會は六時半、會員には常に皆出席の辻寛氏あり氏の第一回卒業生談小野梓先生當時より始まり、何れも舊を談し新を語る。酒は酣にして意氣更に加はるや、『都の西北』なる校歌は一層の色彩を放ち、一同書生時代に歸り、和氣霧々裡に充分の歡を盡し、多幸なるべき新年を祈りつ、散會せしは十時半なりき。

因に當日出席者は如左。

- 辻 寛 小安 章 種田 政徳
- 高田 隆平 永井民之進 黒田 傳三
- 中上庄次郎 宇佐美文藏 熊澤龍太郎
- 岡田憲一郎 吉田日音吉 佐伯 孝平

●四十五年會忘年會

十二月十六日午後六時より、東京市麹町區有樂町一ノ三、幸樂に於て、明治四十五年政治科出身の同窓より成る四十五年會忘年會を開く。例に依り和氣霧々裡に歡談、清語頻りに

●大政四十五年會

十二月十三日午後六時より、神田小川常盤樓に於て忘年會を開く。在京會員二十六名なるも、事故の爲め缺席者多く、出席者は僅に下記九名に過ぎざりしが、而も久振りの會合の事として談論湧くが如く、牛鍋を突きつ、時の移るを忘れしむ。當日麻田君の壺哲學の講演最も異彩を放てり。尚席上左記の通り本會の規約を草安し之を新年宴會に提議するこ

- 堀崎 敏雄 福島 義夫 蜂巣 義雄
- 麻田 毅 河原平次郎 高宮 安夫
- 岩本 次吉 外山 五一 佐藤 元郎

大政四十五年會規約草案

第一條 本會は大政四十五年會と稱す。

第二條 本會は會員相互の親睦を圖り協力共助を目的とす。

第三條 本會には常任幹事、會計監督各一名を置く。

第四條 本會は春秋二回大會を開催し其他隨時會合することあるべし。

第五條 會費は其都度幹事に於て之を決定す。

其他會合の費に供する爲め會員は毎月一定の會費を納むるものとす。

第六條 本會は永遠の發展を期する爲め會員より基金として任意の寄附を歓迎す。

以上

第六回七赤會

十一月二十八日夜、神樂坂「山」に於て開會、正金の久保清藏君の孟買轉勤送別を重ねた。これで會員の三名が新嘉坡以西へ行つた。突然的會合でもあつたが、相應に事故者が多かつた。出席者は左の通り。大久保。柏。倉。赤尾。石川。馬屋。原。長谷川。柴。正。山。中。澤。

得文會

阪崎坦君が、東京朝日新聞記者として巴里に遊學すること、なつたのと、藤田忍君が歐米漫遊から歸つたのと、須藤鐘一君の傑作集「愛憎」が

出版されたのを祝して、十二月二十日得文會を赤坂の「もみぢ」で開いた。集まれるもの坂崎坦君、萬朝の伊藤理基君、三菱の金木九萬君、講談俱樂部の淵田忠良君、井上和英大辭典定價八圓といふ彪大を作り上げた努力家の吉岡文次郎君、セル・フレッサー會社のG部々長の千葉清胤君、横濱で貿易をやつて居る石澤亨助君、東京日々新聞の今周而君と花園兼定君であつた。肝心の主賓の一人で麹町の山王に宏壯な邸宅を建てた藤田君が見えなかつたことは残念であつた。早速席上連名で藤田君に問責状と次回の罰金決議を申送つた。尙坪内老博士及金子筑水博士へも寄書を送つた。坦君は一月中に神戸出帆、巴里へ向はれる筈である。同君の無事を祈る次第である。須藤君が作家として立つ上に非常なハンチカッブは、同窓に一人の批評家をも有しないことで、同氏が文壇に獨自の位置を占めたことは決して内輪褒めの結果でないことを誇とする。藤田君や千葉君が實業家として成功したについても、全く關係の少い境地で成功したのであつて、大に誇としないでならぬ。吾人は徒に世間體の成功を誇とするものではないが、此等の人々が獨自の目的を果し得たことを眞に喜ぶのである。

(X Y Z)

大阪電燈校友會

十二月二十四日夜、河亦樓に於て早大出身者庶務課長萩原氏以下十二名相會して忘年會を開催せり。大に飲み大に語り、大に友情を温めて解散したるは十時なりき。

出席者

- 萩原 古壽 大西 義一 入交 武猪 立田 純一 石倉 敏良 高見 元市 大日方 篤 山根 貞藏 速水信四郎 土谷 榮 荻野 二郎 辻 正二郎

芝浦製作稻門會

芝浦製作所に在職する校友が相集り、稻門會なるものを組織して相互の親睦を計つて居る。年々増加して行く新校友と共に益々隆盛となり、現在では實に百名に近い會員となつた。先輩の校友からして勤勉に眞面目に會社の爲に働く事が一同の風習になつてゐて、眞に芝浦の中堅を爲してゐる。十二月廿三日に例年の如く稻門會大會を催した。會場は永樂俱樂部、出席者は近來にない多數で隨つて亦近來にない盛會であつた。幹事の諸報告があつてから、各人約五分間つゞの氣焔を挙げ、(午後五時開會)午後九時過散會した。(上田)尙當日の出席者の氏名は次の如し

- 理工科卒業生 (順序不同) 近藤泰三郎 壺河 卓爾 大野 寅吉 間庭 隆一 吉成 春吉 西村 益夫 古賀 貞雄 土師 寅造 木原 三 上田 輝雄 寺師 英磨 池上 芳周 中山 本磨 岡野 董 河町 應 山木市長次 山田 節 増田英二郎

校友面影

- 杉江 敏雄 關根弘之助 相馬 進 鈴木 勤 内田 英志 佐藤 恒 船橋 浩 荒井鹿三郎 小林 清三 岡崎 省三 星野 信嗣 高井 深 飯田 雅彦 木村 二郎 高橋慶之助 湯淺 興紀 山田 豊亮 山家 哲三 新井 輝雄 塙 裏郎 柴田 元治 横田 勳 關 正治 商科卒業生 日向 毅 奥山 一雄 大竹 毅 片岡 清 清原 秋彦 清水 澤一

- 鈴木國太郎 榎本 靜一 横濱 鐵城 金子 美隆 玉置 鄭次 入澤 忠二 水野 春吉 清島 龍樹 黒田 國吉 伊東 六郎 特別會員 中川 常藏 内藤 多伸 大正十年度幹事 伊東 六郎 清島 龍樹 杉江 敏雄 關根弘之助 横田 勳 常任幹事 湯淺 興紀

衆議院議員 田淵豐吉氏

四十三議會が開かれると、そこに識者から非常な興味を以つて迎へられた斯人の一團が出現した。夙に保了期限の過ぎた古屋に新政綱の用材で一時の修繕をして、尙其歴史の古さと屋臺骨の彪大さを誇つて居る既成政黨に愛憎をつかし、憂國憤世の志士氣取で役者もときに演壇で悲憤の聲を遣ひ、其の實年二千圓の日常取化した職業政治家と握手するを快としないで、やがてこの既成政黨が崩壊し、職業的政治家が理窟されて、新眞政黨が樹立される、その必然の結果に若目し、猛虎負嶋の姿勢で時機到来をねらつて居るのが此の新人の一團なので、吾が田淵氏は實に其の内の一人者であるのである。議會生活でこそ一年生ではあるが政治家としては實に長い修養を積むだ卒業生である。吾が早稲田に五年間の政治經濟學を修めながら、ノート製造の筆工に浮身を瘦すの愚に倣はず、戸塚の村會議員を兼ねた程の實學研究者であつた。四十一年に業を卒へてから、財政學及財政の研究を志して先づ獨逸に留學した。三年半の獨逸生活から佛蘭西に移り、英國に一年、米國に半歳といふ様に、歐米列強の學理と實際との研究に六ヶ年の日数を費し、其識見を豊かにして歸朝したのである。四百六十の議員中、是れ丈の洗練を経たものが果して幾人あるであらうか。加之氏は熱腸鐵心の士、膽力機略の人である。



幾度か訪問の機を逸して漸く曩日九段坂上の松葉館に音づれて見ると舊臘から胃腸を害して病褥に在るといふ。免も角もと刺を通ずると、快く面談を承諾された。始めに失望した丈にそれが嬉しかった。

獨逸では三年半小學校の生徒の様に一週二十時間も財政學研究に通學したが、語學の不充分なのと先先の多忙なとで豫期の收穫を齎らすとが出来なかつた。夫れに日本から留學生で政治經濟を研究して居るものが一人も居ないので友から受くる利益は全く無く、實に不便な憐むべき状態であつた。只今日になつて彼地の著書を通して、ホルケルト氏が身振をしながらの講義振やワグナー氏が涙を垂れて自國の財政の英佛に劣れることを慷慨された面影や、ブレンダノー、ランブレヒト、ズント等の諸博士の面貌が眼前に髣髴と想起されて愉快である。

更に知られて居ないのだ。吾が留學生等は何處で如何に何物を研究して居たのかしらと怪しまざるを得ぬ。政治組織にしても同様で、近來殊に喧しい愛蘭問題等も、二島の國情や關係等は研究されて居ない自分は親しく愛蘭の地を踏むて見たが、ヂク／＼した濕地の貧弱の土地で、住民も亦愁むべきもので冬も單衣で震へながら泥炭を焚



衆議院議員 淵田豊吉氏

き蠶を喰つ居る始末である。曾ては一千萬の人口を包擁して居たのに、皆米國に移住して、今日では四百萬に減じてしまつた。原因は苛歛誅求の爲で、肥えた牛は五十圓で徵發する、土地は三年目には引上げて地代を騰けるといふ暴虐振りなのだつたから、反抗的氣分の漲つて居るのも無理はない。ダブリンでは、女中までが、寧獨逸皇帝

の治下に立つた方が可いといつて居た。一農夫は、三人の富豪の馬鹿息子が今度從軍した等と嘲つて居た。反抗の根柢の如何に深いかは實際に臨むで始めて眞に諒解される。吾が國の政治外交の改良作振を圖るには、實際を研究せねばダメである。頭のある人が五十人六十人と一時に行つて、十年二十年と繼續的に世界の實狀を調査研

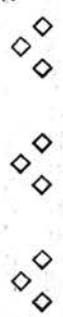
究するやうにせねばならぬ。同じく國家の爲めに盡すのだ、一生を打込むで研究し、骨を異國に埋むるも亦男兒の本懐事ではないか。二三年位逗留しては直に歸國して外國通を振廻はす様で、如何して本統の事が出来やうか。そこは彼國では偉い。獨逸の學者は英國を研究してチャンと著書を公にしてゐる。英國でも獨逸の研究がされ

佛、米又同様である。日本人に誰がこうした研究をした者があらうか。二三年経つと直に歸りたがる者の研究は推して知るべしだ。其の一例を舉げて見るならば、米國の市制に關する調査のことである。よく米國は市制が進歩してゐるといふ。それが皮相の研究なのだ、米國の市制は曾て腐敗を極めたので、之れを廓清すべく歐洲のそれを研究調査したものだ。只それ丈なのだ。實際の進歩ではなく、研究調査の進歩に過ぎないのである。又醫學醫術が進歩して居るといふが、大學に三等級あるのも、一に機械設備の多寡完否を標準としての區別であつて、一見驚かされるが、安ぞ知らんそれは内容實質の進歩ではなくて只外形の美のみである。

と一太刀駕倒を浴びせてから、米國女流の社會的活動の盛んなのと、果實や野采魚類の甘さとを讚美して、話頭一轉、排日問題に移つた。米國は亞細亞と歐羅巴との中間にあつて、吾が國と同一地帯にある爲めか、地質や植物が類似して居るそうだ。それ丈日本人の移住に適するのであらう。自分の郷里和歌山の一村から、男子一千人女子五六百人彼地へ行つて漁業を営むのである。が、組織的の頭がないので製造販賣共に米人の手に委ね

て居る始末である。それに米人の吾に對する態度は小面憎い程で、舟の免許狀は容易に下けないとか鮑は取つてはならぬ賣つてはならぬとかと法律で宥めて居る。農産物は相場の上下が激しいので立ち行かぬといふ始末、結局雇傭となる外はないことになる。で粗食に甘じながら、床屋等三人前も働いてゐる、莓取は腰の伸びない程匍つて活いて居る。實に憐れなものである。其の上忍びない程の侮蔑を受けて居るのだ。或芝居へは入れぬとか、或飲食店へは許さぬとか、吾々も航海中等はボーイ位に取扱はれて、食堂に入つても、順番で後に廻はされたが、盡く癪にさわらぬはない始末である。何故かくも排斥的態度取るであらうか。思ふに米國は同化主義の國であるところか日本人は非同化的國民であり、縱令同化しても素質の善くない人種である。米國へは是れまで幾多の人種が入込むだ。その爲め人種問題でサン／＼憐むで居る。この上日本人を入れて問題を加へるの煩に堪へぬといふにあるであらう。米國は農業國である。排日問題は農業に關聯して起つたのだが、やがて工業國となり、南米の農業國と相呼應して一層排日の火の手を揚げはしまいか。問題の解決は宗教の力では覺束無い

し、反太平洋會の活動にも望みは薄い。移民問題位で戦争も馬鹿らしいが、只國威を傷けられた場合は如何なるものかしら。而し米國のみが日本の永久の敵ではあるまい。形勢の變化は何を敵とするか考慮一番すべきである。曾て英獨は海軍の均齊を保たうとした。而し十六對十の均齊案は獨逸の不承諾で協調が破れ、獨逸はキール運河を開鑿して其の力を二倍にした次いで大戦は起つたのである。米國は獨の古智を學んで巴奈馬運河を開鑿した。これは英國の海軍を脅かすものであつて、將來英米の競争は到底免れまい。そこに日本の活躍すべき興味ある機會が到來するであらう。支那問題も畢竟日英米の問題である。米はアラスカを購ひ、支那を手懐け、西比利に狼臂を伸ばして日本を包圍してしまつた。内には危険な思想家も無いとは限らぬし、日本現時の形勢は頗る憂慮すべきものである。之れに對して内閣諸公に如何の方策があるであらうか。聽きたいものだ。一國の宰相ともあらうものは、堂々と世界の舞臺へ乗出して親しく形勢をも目撃し、諸豪と臂を交へて樽俎折衝する位でなくては眞の國策樹立は出來ぬ。國內に引込むで居て想像説を根據に氣焔を擧げる位では、國歩艱難の現狀を攝理することは思ひも寄らぬ……。



病苦を忘れて舌端火を吐くその情熱には、聽者も共に燃えずには居られなかつた。實に今日の日本は第二維新に際會したのだ。而も形勢は第一維新時よりも一層離隔である。外は列強の憎惡を買ひ弱邦の嘲笑を受

### 校 友 動 靜

政尾藤吉氏(二二英普)は、今回暹羅公使に任命せられ、一月二十八日東京發赴任の途に上るといふ。

#### ● 別府新熊氏

別府氏は、新嘉坡大和商會輸出入部主任として活動しつゝ、あり。氏は三一年度文學科の出なりしも、誤つて久しく校友會員名簿より脱しありしを以て、茲に特記して正誤となす。

#### ● 坂崎坦氏の渡佛

朝日新聞記者として美術に關する造詣深き坂崎氏(四三・大英)は、今回近代美術史研究のため同社より二ヶ年間佛國へ派遣せらる。

#### ● 三枝忠二氏

西印度玖瑪に滞在中なりし三枝氏(五專政)は、九月アパナ港出帆、歐洲各地を視察して今春三四月の頃歸朝の豫定なりと。

け、内には挺身國難に殉する志士もなく應響奮起する國民の感受性は鈍つてゐる。加之非國民的のものも無いとは保證されないからで……。とはいへ吾人は決して悲觀者ではない。氏の如き新人の手に依つて、第二維新が美事に建設さるゝであらうとを確信するからで……。(T)

#### ● 判檢事及辯護士試験

##### 登第者

客年度判檢事及辯護士試験に於て校友中登第の榮を荷へるもの左の如し。

##### △判檢事及辯護士

大正六年專門部法律科 廣井 泉

##### △判檢事

明治三十八年專門部法律科 辻本作太郎

#### ● 松原九郎氏逝去

前に本大學評議員として又代議士として令聞ありし岐阜の松原氏(二二邦法)は、病癘の爲め遂に去る十一月十四日逝去せらる。

#### ● 佐藤甚九郎氏逝去

佐藤氏(二三邦政)には、十二月十一日醫療其效なく遂に逝去せらる。氏は宮城の人、同縣の多額稅者にして明治製革會社取締役なりき。十

### 職業移動

日西江戸川の邸に告別式を舉げ、十七日郷地米谷町に於て本葬を執行せり。

●南部要(7大政)開原、横濱正金銀行支店勤務  
●佐賀七郎(2商)増田貿易株式會社を退社す。(大連市能登町ヲ區三四號)

●今井正也(4商)大阪商船株式會社大阪支店勤務(大阪府中河内郡若江村)  
●河出源一(4商)大阪市東區唐物町四、飯田定商店勤務  
●三浦孝一(7商)大林組に轉勤(大阪市東區京橋三丁目大林組)

●氏家隆武(8電氣)枝光製鐵所鐵合金課勤務(八幡市西本町六丁目富重方)  
●川島一男(6國漢)千葉縣立千葉高等女學校に奉職(千葉市北道場加藤英次郎方)

●下津一雄(4國漢)鹿兒島縣立第二中學校に轉任  
●深澤由次郎(3推)本大學講師となる(市外巢鴨町堀之内九八一)「原籍地山梨縣」

### 轉 居

●柳川勝一(教授) Hotel 3 gina, Avenue 3 gina Paris France

●山本儀太郎(二三邦政)名古屋市東區板屋町一八  
●高根清(8專政)市外千駄ヶ谷四〇五  
●齋木政太郎(7大政)横濱市青木町上反町四九四

●中川靜(一九邦法)神戸市賣合町二一八(市電熊内二丁目停留所より山手に約一丁半)  
●福田喜孝(4專法)府下西大久保二八一

●宮崎宗二郎(7專法)横濱市西戸部町鹽田一七一  
●白神亮(8專法)府下戸塚町源兵衛九三望岳樓  
●三輪末彦(四三大英)牛込區袋町三都館支店

●小林健(四三商)麻布區筭町七九  
●佐藤政一(四三商)本所區向島須崎町二〇九  
●秋山一三(四四商)名古屋市西區仲ノ町一ノ二

●築田秀一(2商)石狩國札幌郡琴似村帝國製麻會社琴似製綿工場社宅  
●岡本雅亮(3商)府下巢鴨町字宮仲二七八三  
●岡田虎雄(4商)府下下遊谷一一八九

●島田平治郎(5商)牛込區拂方町八  
●茂木四郎(6商)牛込區柳町二  
●鯉淵啓(8商)本郷區三組町九三最上館

●眞野官一(2電氣)麻布區筭區一四

- 鹽澤正一(5採治) 府下大森町二一七七
- 飯田亮(四二英語) 栃木縣立真岡中學校
- 金井嘉佐太郎(2國漢) 横濱市青木町一九六四
- 根岸一(7英語) 札幌區大通西六丁目(開拓記念碑前)

大正九年度得業生之部

專政

- 泉二郎、大倉鑛業株式會社室蘭出張所勤務(室蘭區海岸町一)
- 大野萬治、大阪株券株式會社取締役となる(大阪府西成郡鷺洲町大仁)
- 的場哲、神奈川縣知事官房外務課勤務(芝區南佐久間町一ノ三佐々木福藏方)
- 保賀俊治、葛原冷蔵庫勤務(北海道渡島國茅部郡森村)

大政

- 宮川源治、岡山歩兵第五十四聯隊第五中隊に入營
- 辻正二郎、大阪電燈株式會社庶務課勤務

商科

- 林勝人、廣島歩兵第十一聯隊第二中隊主計生として入營
- 大森一男、内外興業株式會社へ轉

職(小石川區關口町四八丹野方)  
●鹿島孝麿、牛込區原町二ノ四三  
●竹内九一郎、支那上海橫濱正金銀行支店勤務

改姓名

●有田時化雄(8國漢) 松本と改姓  
(福岡縣遠賀郡島門村 大字廣渡)

死亡

大正三年大學部商科得業  
大正九年十二月九日死亡  
田淵 武一氏

學生會合

各科聯合懸賞討論會

中村萬吉、遊佐慶夫兩教授出題の「空權は權利の客體となすことを得るか」に付き、十一月十三日午後一時より第二十教室に於て各科聯合討論會を開く。

出題者たる兩教授の外、寺尾元彦教授並に校友星望庄次郎、安高祖忠進、高井忠夫、平下清榮の四氏參會す。

問題の嶄新なるがため各科聯合とし、他山の石を求めんとせしも、結局法科専門の討論會となりしは遺憾なりき。併し各出演者の研究發表の豊富にして着想新奇なるもの多く、發明する所多かりしは空前なりき。

明治二十四年專修英語科得業  
明治二十七年文學科得業  
大正九年十二月二十三日死亡  
浮岳 信氏

明治二十七年文學科得業  
藤戸 達吾氏

大正九年大學部商科得業  
大正九年十月死亡  
田中 敬次氏

合諸氏の計報に接し哀悼の至りに堪へず茲に謹みて弔意を表す  
大正十年一月十日  
早稻田大學校友會

先づ第一に專法一年の佐藤末野君登壇民法二〇七條に基き、簡單に權利の客體たること制定法上當然を容る、餘地なしと述べて降壇す。  
次に大法一年の太田金次郎君は、エーリングの權利に關する利益説を引用して空間を權利の客體とすることは不利なるが故に客體とすべからずと消極説を主張す。然れども是れエ氏の利益説を誤り引用せられたるものなり何となれば立法の利害と權利自體の利益とは異ればなり。  
次に專法三年の小澤金一君登壇、權利に關する諸説を擧げて簡單に批評し現今の通説に従ひ、吾人の生活利益を法が保護する主張力なりとの説に基きて權利の各要件に付きて空間が各體たるに適するや否やを論評して其適格

(客體たるの)あることを高唱し、更に進んで空間支配權の性質に論及し、準物權的性質なりと断定し又空間の上部制限論にも論及せり。  
次に專法一年の濱野堅秀君は、空間の定義を廣汎なる諸科學より引用して簡單に之を批評し、進んで我民法二〇七條に相當する列國の民法を援用して同様な空間を權利の客體と規定せる旨を述べ。  
次に大法二年の山内隆一君は、先づ前積極論が、單に空間を權利の客體とせざれば土地の利用をなす能はざるが故にと云ふだけの理由の下にのみ積極論を主張し、本質上客體たり得るものなりとの理由を擧げざるを論駁し、二〇七條は單に條理上利益の存する限度に於てのみ空間を利用するのみにて無制限のものにあらず、又物權編全體より見るも有體物に非ざるが故に物權の客體たらずと、猶ほ詳細に例示して空間を當然權利の客體とするときの不便を論述せり。  
次に專法三年の山根金一君は、權利の性質權利の客體の意義を簡單に説明して、空間も獨立し權利の客體たり得るや、土地と一體となり始めて客體たり得るものなりやに論及し、二〇七條に基き、土地と一體をなして吾人文明の程度に於て支配可能の上空までは權利の客體たり得るものなることを論ぜり。更に民法二三三條の枝條除權親野地役權等より空間が當然權利の客體たることを認めたる理由を論述せり。  
次に專法二年の内山商一君は、雄辯を以て空間を法律上一種の物なりと獨斷

を下して積極説を高唱し、專法二年の島袋牛一君は、權利の分類、空間の性質立法の沿革等より説き起し、二〇七條は單に公益を害せざる範圍内に於て土地所有者の權利として認めたるのみと消極説に賛し、大法二年の長場正利君は、國際法上の占有不可能説所有不可能説を論駁し、空中用役論等の積極論をも駁して領土權の客體となり得るものなることを主張し、私法上よりは空間物體説を批難し、空間土地論を高唱して曰く、土地其他一切の物體も空間を離れて考ふる能はず、故に空間即土地なる見地より始めて權利の客體となすを得べきものなり。と明確に論述せり。  
大法二年の寺内卯三一君は、二〇七條と同論旨の各國立法を援用し、土地利用の必要より生ずる反射的効力にして其無限の上空には何等權利なきものなることを力説す。  
專法三年の鎌田貞一君は、空間を絕對無限なりとすれば支配不可能なるが故に客體たること能はざるは當然なり、故に一定區劃の空間の意味なりと解せざるべからずと前提して權利の性質論に入り、進んで客體の本質論に移り、空間が權利の客體たるに適する所以を説けり。  
次に專法三年の石原勇君、空間に關する問題が現時極めて緊切なる理由を高唱して空間及權利の定義を吟味し、二〇七條に根據して積極論を主張す。  
大法二年の村上周三君、空間の固有性、確定性、存在性を否定して客體たるに適合ざるを説き附從性を説きて單に土

地の所有權の効力に過ぎずと論ぜり。專法二年の吉村五郎、簡單に積極説を述べ、次に專法三年中村米次君、空部は權利の客體に非ず、單に土地所有權の反射的効力なる所以を簡單に述べ、降壇。

專法二年の小笠原謙藏君、消極説の各弱點を抽出して一々論駁を加へ、二〇七條の積極説の立場を明にせり。討論終るや遊佐教授より審判のため數分間の休憩を宣し、且つ寺尾教授の外四校友の立會をも請求し審議の結果左記の通りに決せり。

一等 長場正利君。二等 井上周三君。三等 小笠原謙藏君。四等 鎌田貞一君。四等 山内隆一君。遊佐教授より校友高井忠夫の紹介ありて本問に關する研究報告を終るや、中村教授より批評並に意見の發表あり、消極的見解を高潮すれば、遊佐教授は積極的見地にて詳細なる講評を試み、拍手裡に賞品授與を了して閉會す。

●早稻田内燃機關研究會

消息

第七回講演會

本大學理工學部機械工學科生有志によつて組織さる、早稻田内燃機關研究會では、九月新學期に入つてから、早速講演會を開催する筈であつたが、牛僧第二學期早々試験があるとの事で、豫定通りに進行せず、其内試験は十月十日より十六日迄との發表があり、其後すぐ秋期陸上大

運動會、秋期休暇、明治神宮鎮座祭といふ有様で、兎角休み勝であつたが、餘り延す事も出来ず、一方機械科二年生は、五日より二泊の豫定で足尾日光方面に見學旅行に行く事になつたが、その歸りを待つと餘り後る、ので、止むなく十一月六日(土)午後一時より、新學期に入つてから最初の講演會を開催した。會場には恩賜紀念館階段教室を充て、會長渡部教授司會の下に開催した。此日の講演は

一、自動車の設計に就て

早稻田大學工學士 白澤 元君

一、自動車界の現在及將來

「モーター」誌主幹 山本恩太君

一、歐米自動車界視察談

日本自動車株式會社技師 柴藤菅一君

一、歐洲戰爭の産める自動車界の現状

陸軍輜重兵少佐 水谷吉藏君

の四氏の豫定であつた、白澤君は十一月十三日、渡米の途に上る筈で、會員一同は、御名残り講演として、非常に熱心なる期待を持つて居たが渡米手續のため、參會不可能の電報が届き、會員一同は残念に思つた。其れでこの講演は、歸朝早々視察談を兼ねて戴くつもりである。

最初「モーター」誌、主幹山本恩太氏登壇、先づ氏が十數年前、自動車界に身を投ぜられし頃よりの、自

動車の數、其の當時の本邦自動車工業から次で現在に及ぼし、最後に將來に對する豫想等を、過去十數年の研究より得たるところを講演せられ吾等は實に自動車の生きた歴史を初めて聞かされたのであつた。

次に、日本自動車株式會社技師、柴藤菅一氏拍手の中に現はれ、最近に於ける歐米自動車界を旅行順に講演せられ、恰も吾等は各國を漫遊しつ、各工場等を眼の前に見てゐる様で、米國に於ける自動車工業の大規模なるに眼を睜つた。殊に氏は多年の研究を傾けて聽衆に多大の知識と感動とを與へたのみならず、自動車に關する質問を許されて、一時間有半にて壇を下られた。

會議室にて少憩後、水谷少佐拍手裡に登壇し、其該博なる研究を述べらるに、極めて巧妙なる修辭と、深甚なる熱情を以てせられ、約二時間に亘りて歐洲戰爭の産める各種の自動車につき詳述され、殊に「タンク」は一同非常なる興味を以て傾聽した終りに本邦技術家學者の發奮を要望して割る、が如き喝采裡に降壇す。

最後に會長渡部教授及學生幹事、吉原氏登壇、講演者の勞を謝し、閉會せるは五時半。この日、機械科二年生の一部は旅行中、校庭講堂には科外講演ありしも、來會者百數十名、非常に盛大であつた。

▲第三回内燃機關見學

吾が研究會は十一月二十六日(金)第三回見學を行つた。十二時半芝市電停留場集合、校友菅野君に案内せられて芝浦理立の「セルフレザ」會社工場に赴き、「イスマノスキザ」百八十馬力飛行機用發動機の分解してあるもの及組立あるものに付き、渡部教授及菅野君の熱心なる説明を聽きて見學した。廻轉式星型の「ローン」發動機も分離されてあり、各部の構造作用等實に良く腦裡に徹底した。其れから秋の枯草を縫うて約四五丁、芝浦の鏡の如き海を左に見つ、同工場、飛行機格納庫に行つて、水上飛行機二臺及「カーチス」發動機を見學した。一同は交々格納庫の飛行機に乗つて飛行家氣取りに把手を握つて翼の動かし方などをやり、興湧いて時の移るを知らなかつた。午後三時半の次の工場の約束もあるので、踵をかはし、芝の池貝鐵工場「ボリッダー」發動機工場に急いだ。先づ二組に分れて、二名の案内者の熱心なる説明に順次鑄物工場、仕上工場、試運轉場、推進器工場等約二時間に亘りて見學し、一同十二分に満足裡に解散したるは、町は夜の「イルミネーション」に入らんとする午後五時半であつた。此の心なる會員は、三々五々集まつて、殆ど百名に達したのは特筆に値する。(一一、二七吉原四郎)

●支那協會例會並研究會報告

本校唯一の支那及び東亞事情研究機關たる支那協會は、第二學期最終の例會を、去る十二月四日矢來くらぶで開かれた。集るもの二十有餘名、會長青柳先生は都合上止むなく缺席なされた爲め、渡部幹事長を取りまいて相互に意見を交換し、或は論議を起して、大いに會の將來の爲め我等の研究的態度を緊張せしめた。即ち渡先生は、現代思潮の淺薄にして一つの信念なく、あたふ外國のことにのみ頭をかたむけ、日本人の魂のなきこと、且つ身體を健全にするをおこたり、青い顔をして理窟ばかりならべておること、これ實に日本將來の爲に悲しむべき現象なりと注意せられた。ついで學生側の降旗君の「世界大勢日米、日支、米支論」中村君の支露關係論、刀根君の會の過去及び將來の報告希望、其他數氏の意見發表ありて、面白く且つ有益に閉會を告げた。

次に本協會昨年度の研究事業を見るに  
本會顧問 一、北洋軍閥分裂の真相  
清水泰治先生  
本會顧問 二、支那社會の動搖  
善生永助氏  
支那經濟問題  
幹事長

渡俊治先生

- 一、楊子江沿岸の産業
- 二、交通概要

會長

青柳篤恒先生

- 一、邦人の支那に建設せる歴史的事業
- 二、所謂二十一箇條の研究

因に清水先生は昨年夏親しく支那に御渡航の上研究されたものを毎週一時間宛、善生先生(戦後の支那著者)は財政經濟時報社の用務多忙なるにもか、わらず毎週二時間講義せられたることを我等は深く感謝するものである。渡、青柳兩先生にも、これ又毎週一時間づつ有益なる御話し下されたことは會の將來の爲に喜びに堪へざるところである。

元來我早稻田に於ては、此の種の會合は多い様であるが、多くは一時的のものであり且つ又眞面目を缺いてはおるまいかとの憾みなきを得ない。我等は新しい春を迎へると同時に、新しい氣分で眞面目に且つ熱心に東亞の事情を研究しようと思ふ。同好の士奮つて我等と行を同じくせられんことを望む。

●史學會十二月例会

本大學史學會は、十二月十一日(土)午後一時より第二十五教室に於て十二月例会を開く。開會の辭に次で左記の講演あり。

明代の人口問題 清水 講師

桃山時代の文化生活 西村 講師

清水講師の數字を根柢に置ける精緻にして而も津々たる趣味に富める西村講師の史料を巧みに活用して時

雜錄

●元旦名刺交換會

一月一日例により學長を始め教職員一同講師室に會し、祝杯を舉げて新年を壽き、名刺を交換して散會せり。

●平沼學長の出張講演

△十二月二日午後六時より佃島小學校講堂に於ける京橋區教育會主催の講演會に臨み、思想問題につきて約二時間講演。

△同十二日午後六時半より、大日本弘道會の招聘に應じ、同會講堂に於て「時勢と思想との關係」と題して講演。

△同十九日埼玉縣南埼玉郡栢間村教育會、同在郷軍人會及同青年團聯合會主催の講演會より聘せられ、同日午前十時二十八分上野驛發、會場たる同地小學校に於て「變時の思想と王道」といふを題に講演、即日歸京せり。

●伊地知教授、小室教授及高井忠夫氏送迎會

十二月三日午後五時より永樂俱樂部に於て、教授伊地知純正氏の歸朝

代の生活様式を眼前に髣髴たらしめたる、共に聽者に甚大なる益を與へらる。終りに石野幹事より兩講師に對して謝辭を述べ、閉會せしは午後四時過ぎなりき。

歡迎會に、教授小室靜夫氏及高井忠夫氏の留學送別會を兼ねて開催す。

デザートコースに入るや、平沼學長は立ち一場の挨拶を爲す。昨年學術研究の目的を以つて歐米に赴かれし伊地知氏が、多大の收穫を齎らして無事歸朝せられたるを以つて、茲に聊か歡迎の意を表せんとて此會を開きし所以なり。尙今夕は併せて近く留學の途に上らるゝ小室高井兩氏の行を壯んにせんとす。小室氏は専門の探礦冶金、特に鐵に關する研究の爲め、從來曾て例なかりしスカンヂナビヤにまで其の足跡を印せんとし、高井氏は米國コロンビヤ大學に於て海法及國際私法を攻究せられんとす。切に兩氏の健康を祈る。尙今夕は杉田駿氏をも招待せり。氏は校友にして實業界の驍將、母校の爲めに盡力せらるゝと聽かす。特に留學生の爲に關して留意せされ、今回出發の高井氏の學費は、氏の提供するところなり。かゝる同情を受くるを得たるは又本大學の光榮とするところなりとす。云々。

それより伊地知氏の謝辭に次いで興味深き歐米視察談あり、小室・高井兩氏も亦交々立ちて謝意を述べ、九時散會せり。當日の出席者は左の如し。

(主賓)

伊地知純正 小室 靜夫  
高井 忠夫 杉田 駿

(會員) 順序不同

松本 容吉 寺尾 元彦  
平沼 淑郎 前田 多藏  
小林 久平 小林 行昌  
田中 穂積 小林 堅三  
蠅崎 敏雄 氏家 謙曹  
土屋 啓造 中島半次郎  
大橋 誠一 杉田金之助  
大東直太郎 金子 馬治  
日高 只一 遊佐 慶夫  
武信山太郎 鹽澤 昌貞  
武井友次郎

●高田博士主催晚餐會

十二月十三日、高田博士には、永樂俱樂部に淺野理工學部々長及同部學科主任留學生たる徳永、松本(容吉)小室、堤、吉田、富井(逸二郎)及校醫酒井の諸氏を招して晚餐會を開かたれり。

大正九年度 本會維持費釀出者氏名報告

永田 誠一 永木 石藏 並河 正  
並河 隆 難波重太郎 武藤 五三  
武藤 直市 村岡 猛二 内田 清一  
生方 徹誠 上野直治郎 矢内 清次  
柳下 實 山口 正雄 丸山 新平

●德永工手學校校長主催晚餐會

十二月十九日午後五時より德永工手學校長には、永樂俱樂部に工手學校各科主任及教授を招して晚餐會を開く。席上德永校長より洋行留守中のことを依囑し、尙田井前主事、片山新主事に對する送迎の挨拶ありたり。

●市川堅吾氏逝去

工手學校講師高等學院事務員校友市川堅吾氏には、かねて病氣中のところ、醫療其の效なく、遂に十二月三日午後七時長逝せらる。哀悼の至りに堪へず。氏は岡崎師範を出で、本大學に入り、四十年國漢科を卒業、爾來工手學校講師より高等學院事務員となり、格勤同僚の儀表たつき。五日小石川關口町大泉寺に於て葬儀を執行す。

●肥塚龍氏逝去

十二月二日、前本大學評議員肥塚龍氏逝去せらる。五日赤坂の白邸に於て告別式を執行す。本大學よりは平沼學長參列、花環を靈前に呈せり。

松井 從夫 松葉 恭助 松崎 久  
松下基三郎 正木 蔚 藤岡 勘治  
古橋鈴太郎 福田市之助 小泉 邦治  
小林謙二郎 小山錦三郎 小松 洪賢  
小牧 龍雄 小平 徳松 古宮 茂信

寺田 廉平 淺山 正三 安倍 敬義  
 赤羽 明治 縣 保三 東 海夫  
 東 隆吉 荒木榮一 新井半之助  
 新井 宗一 弓削 要 澁口 駒造  
 光成 崇善 水無瀬忠政 水野 正巳  
 水野 銀聖 宮副辰次郎 宮岸地大吉  
 宮下 秀一 島田 雅雄 島田 佑一  
 重野 一雄 澁谷貞次郎 日野 辰次  
 日野 忠吾 日比野義雄 毛利 宮彦  
 森田 八郎 關 力夫 首藤 貞吉  
 須藤 今三 杉浦 不二 鈴木 浩一  
 鈴木 祥應 井上 孝 伊東 英保  
 岩田助五郎 岩崎 秀吉長谷川千代松  
 花田勝四郎 花田芳太郎 橋本 廣太  
 橋本 武治 西村 忠一 小野 駿一  
 大和田 稔 大谷武次郎 大森慶次郎  
 岡 好友 太田宇之助 奥田 四郎  
 川久保光正 川崎由三郎 川瀬 四郎  
 河原義治郎 河村 敏 片山 誠三  
 金田 鐵雄 金兒 一夫 金澤種次郎  
 金澤直治郎 金光三代太郎 金光 文孝  
 金光 國開 笠井 宗一 風見 章  
 依田 四頁 橫田傳四郎 吉年宗兵衛  
 吉村與四郎 田沼 武兵 田中 一鷹  
 田中誠之助 田中 淳一 谷 哲二  
 谷本多喜治 橋 圓壽 高原 眞重  
 館山 祐治 津田 毅一 塚越又四郎  
 月本 策彌 直井 元介中川豐(上海)  
 中尾榮次郎 中村登利三 中村 三藏  
 中村 磯 中野 中六 中澤才次郎  
 中島 新一 中島 三郎 長尾 誠一  
 永井 恭太 永野 義徹 難波 英人  
 室塚 鐵二 村田重治郎 村山大二郎  
 武部 冉之 武富禮太郎津木驢太郎  
 上田 景助 内田羊之助 浦井 武雄  
 野田 重三 野口源之助 野吹 實

野崎 一郎 野木茂基知 九鬼 良次  
 久保 三郎 久保源九郎 久布白正巳  
 日下田 實 岡澤 昭光 窪川 直三  
 鞍谷 清慎 熊田與四郎 楠田斧三郎  
 矢野 武一 矢代 代次 矢島 榮助  
 山上 吉藏 山田 宗哉 山田 隆治  
 山内重次郎 山本 文作 山本 八龍  
 山本 敏德 山本 敏雄 保倉 爲七  
 的場清三郎 松尾 長市 松永 將聞  
 松村 増男 松代 太郎 松本 怒平  
 増田幸次郎 淵田長一郎 藤川 主英  
 藤田喜太郎 藤崎 四郎 藤代吉太郎  
 藤森俊一郎 古浦 恒吉 舟崎 仁一  
 深井 功 深澤 増吉小林八右衛門  
 小林 豊次 小林 武男 小林 喜一  
 小林 喜麿 小黒 有 助 小山 晋  
 小松 巧造 小松雄二郎 小柴勇之助  
 小鹽 健吉古田島和太郎 後藤鐵次郎  
 鯉淵 豊貞 河野 讓 權藤四郎介  
 江川 薰 榎本 秀夫 遠藤 寛  
 遠藤 孝一 寺島 知宏 寺本喜一郎  
 阿部松五郎 有田 温三 青山 稔  
 赤澤虎之助 朝倉 文治 秋本 統一  
 安達 弘真 安藤 正雄 安次郎左衛門  
 佐藤 定雄 佐藤 準市 佐々木誠吉  
 齋藤 廣路 齋藤 武 齋藤 清治  
 澤 亮 澤田信太郎 澤島 政平  
 阪田 久彌 櫻井文太郎 崔斗 善  
 絹川 太一 岸 龜 岸 平  
 吉良 憲 狐塚清太郎 齋 相 兼  
 三橋 權藏 三和彌三郎 三好 直英  
 三谷 清一 三浦 正治 滿田 和  
 滿田 好秋 水口 茫 宮崎 理  
 宮本 敬治 志方嘉太郎 清水 政吉  
 清水 通三 白須 宗吉 白石 保  
 柴田 秀藏 鹽津猪十太信太儀左衛門

信太 友親 島田治七郎 島田兵一郎  
 澁田 茂太 申 錫 雨 日高 傳造  
 神田 三平 廣端 辰明 一杉 榮  
 平賀 一藏 久野 眞苗 兩角 哲郎  
 諸井 光政 宇永和三郎 森川 大吉  
 森田儀三郎 森村 蓮一 森下 國雄  
 瀨古 守藏 關 順一郎 關 芳次郎  
 洲崎 義郎 須野崎文彦 杉田 俊吉  
 鈴木 誠一 鈴木 保 鈴木 正俊  
 鈴木 健三 鈴木 篤 鈴木竹次郎  
 井上 泰岳 岩根 榮一 長谷川 素  
 早川 富平 西村髮太郎 大野 恭平  
 若林 晴雄 渡瀬 保治 桂 達二  
 金子 廣作 風井 晋一 加藤 正信  
 吉村 正人 芳原 慶壽 田中 豐文  
 田中 恒美 田島 常吉 谷口 源清  
 高垣 光藏 高口 龜一 武井 正房  
 武内 作平 相馬 恭一 相馬 和雄  
 士金兵太郎 彌吉 保次 那須善五郎  
 中垣内 輝 中村 實 中村 喜藏  
 中村 英祐 中島喜一郎 中島 饒  
 永野 榮助 鳴海 浩 村上 廷太  
 村山 快照 内田 彌八 内野 江一  
 内海 東男 野津 醇 野口勘三郎  
 野崎 建之 野崎 誠近 久保 憲一  
 黒河内信彌 栗原 静造 倉田 菊藏  
 熊田龍五郎 矢野 芳 山邊英太郎  
 山縣 長六山田嘉右衛門 山田 喜次  
 山内 舜助 山本 爲治 丸寶 眞行  
 松井 通 松原 達藏 松田 眞造  
 松崎爲三郎 松本 俊博 松本 種夫  
 牧 単人 増田仁三郎 藤永品太郎  
 藤村 寛 古川 単人 舟城 鶴一  
 福田辨治郎 福浦 一貫 小池甚一郎  
 小出 正吾 小林 福治 小林 光次  
 小林 謙二 小西 春雄 小山鬼十三

小山 松壽 小寺 順吉 小坂菊太郎  
 甲藤 長氣 河野狼吉郎 肥塚 武治  
 近藤 直吉 江木伯助海老塚嘉右衛門  
 遠藤 慈請 有賀啓太郎 有賀 梧樓  
 粟屋 蕭 赤田 盛一 赤木 勇才  
 荒谷 夷一 安保雄四郎 佐藤 光尾  
 佐藤 鐵郎 佐藤 茂亮 佐藤 武雄  
 佐野 徹治 佐々木敬之 齋藤幸之助  
 眞田 武 木尾 眞純 北島淳一郎  
 瀧本五郎治 三好幸三郎 光安 益巳  
 宮原 友記 志道 健治 庄内 貞秀  
 澁谷 丈夫 廣江富四郎 平尾 寛  
 半田 照夫 平野登美夫 本野 博章  
 本山 泰三 森 卓郎 森 愛藏  
 森田 廣治 瀬尾 庸七 關口 世諒  
 須田 武雄 杉浦 俊正 杉本 昇  
 住田 祥和 砂川 一平 鈴木喜四郎  
 河津 暹 中村房次郎 横田 秀雄  
 藤本幸太郎 粟津 清亮 稻垣 祐義  
 堀江 正吾 大岩 節 大和藤兵衛  
 川榮 倬 河島 憲一 金丸親太郎  
 勝井順太郎 龜岡 鶴夫 田中文太郎  
 猶塚 半治 中川 静 中村 將爲  
 中村 健壽 永井 信義 向田 清淳  
 村島 孝一 宇都宮虎二 宇島 寛  
 梅田啓次郎 梅田 眞一 梅澤 仙洲  
 牛尾 英二 野田 襄 野口 亮  
 工藤 郷輔 倉持 一郎 櫛田 正一  
 八木 香苗 彌久末庄七郎柳 嘉次  
 山田 峰藏 山口 經雄 山崎豊太郎  
 山崎 保平 山崎 好和 山下 五陸  
 山本 一 山本 傳 山本 成一  
 山本 旦 岡山 鎮三 前田 彦明  
 町田 嘉作 丸岡 茂吉 松井 美  
 松井 清 松田謹一郎 松下 政藏  
 普光江 隆 藤田利三郎 藤田 開三

藤野 勝男 藤間 八藏 藤森 誠  
 古川勝次郎 舟田 千町 船越作一郎  
 福井龜久夫 福井 玄郎 小林 芳藏  
 小林 鐵二 小山 五美 小山晴一郎  
 兒玉 衛一 近藤 節 江戸千太郎  
 遠藤 盛彌 秋田貞太郎 楊井 二郎  
 赤松 純一 厚東 太郎 赤岡善治郎  
 佐藤十二郎 佐野 春五佐々木修三郎  
 齋藤 正治 里村 磯吉 坂田 成三  
 坂園 武市 貞包 靜雄 櫻内 隆藏  
 木幡 清風 木谷兵次郎 木下賢太郎  
 水野嘉一郎 宮島 綱男 白石 俊夫  
 正司 怒助 新開 貢 日高猪兵衛  
 平井 政治 平塚 四郎 諸遊 康英  
 守田 義逸 世古 松郎 瀬尾嘉五郎  
 關 善治 須賀 隆賢 須田辰五郎  
 杉田長右衛門杉村 正吉 鈴木茂三郎  
 能瀬 正巳 民野 雄平 井上 武夫  
 井上 孝藏 石井 敷市 大山 岩雄  
 河北 精三 柏木 泰 田部種之助  
 谷口 龍 津田 禮三 津島 太郎  
 中村 卯八 中村彌次郎 中村憲太郎  
 中山 熊雄 中島 初次 長坂 友藏  
 室津 市郎 向井壽次郎 宇賀 龍雄  
 宇野 名翠 宇野清一郎 内山 俊治  
 氏家 齊 植田 實 植村 敏樹  
 牛場清次郎 野島 親幸 久保 富太  
 窪田 定雄 倉富 堅吾 楠 瀨壽  
 八木 通重 八木 惠明 八木 豪  
 矢揚 俊一 矢野 通保 山田 敬一  
 山根 省三 山中 忠彦 山口 龍平  
 山口 長夫 山口 太郎 山口 龍公  
 山崎 寛 山崎 信明 山崎文五郎  
 安永 次郎 安岡 豊 矢作 健  
 山口 鏡水 前川富太郎 前田孫兵衛  
 前田三右衛門丸茂 忠郎 松岡勝太郎

松田 一 松田 谷三 松田 勝利  
 松山才四郎 松崎 金藏 松島 恭一  
 牧口 輝方 増淵 諄 萬里小路元秀  
 萬年虎喜智 不破 爲治 藤 達岸  
 藤田横九郎 古城勉之助 深川 忠吉  
 深川 彌作 深川 七藏 福島 輝明  
 福島武之助 小泉 改平 小出 富治  
 小竹文次郎 小松九郎右衛門 古賀 權六  
 後藤五郎右衛門 近藤錦四郎 昆 吉助  
 遠藤恭三郎 遠藤麟太郎 阿部章一郎  
 淺野米三郎 秋山 重泰 安士秋一郎  
 佐藤東一郎 佐々木重藏 坂上 隆雄  
 酒井 正雄 笹野 憲三 木村仙太郎  
 木津 群平 木村宗七郎 木下 新吾  
 木藤 長 木本精太郎 北原 親朗  
 岸 至 三津間 董 三明 諒夫  
 南方 清如 宮地 久雄 志録 重助  
 清水 金八 清水 洵平 柴野仁一郎  
 重岡 忠二 重松停治郎 蓋谷三右衛門  
 比留間子郎 廣瀬安太郎 平野 石藏  
 久富 久吉 正田 運猷 持田 健  
 森 敬則 森 貞 森 繁三  
 森田 省三 森木 嘉明 森本 滋抄  
 百瀬 計馬 杉田金之助 杉村吉之助  
 鈴木熊太郎 鈴木省二郎 鈴木 榮一  
 鈴木 武雄 中村 恒 伊藤 基明  
 岩井 嘉一 蜂須賀武彦 西林 忠治  
 堀内 武夫 戸枝 貞 大崎喜代作  
 沖 作治 加藤 茂正 川又 四郎  
 河合 正雄 河崎 宗真 河瀬 道承  
 勝山 實平 田子 長三 田阪 貞雄  
 平 準彌 武田晴四郎 武田與一郎  
 瀧口 源久 都丸 隆 根木 辰治  
 中尾 忠太 中村豊太郎 中村喜次郎  
 中村 輝雄 中村 岩夫 長澤 春雄  
 長阪 長 村山 真策 有子 夏次郎

與子田教行 内山 廣三 内田 忠則  
 内山重一郎 浮岳 堯文 海原 曉雲  
 野村勘左右門野崎 吉次 延川 忠臣  
 野濤傳一郎 久保田五郎 黒田 龍吉  
 黒澤 昇治 窪田 茂喜 栗林葵末造  
 八木 覺二 山岡 憲定 山中 忍海  
 山浦 武夫 山崎 啓三 山本 稔  
 古市重次郎 古市 敏雄 古田傳二郎  
 深井 延 深見 耀宏 舟橋 達賢  
 福武 慶作 小池 傳 小幡 信  
 小原與一郎 小林 重平 小西 元  
 小谷 綱吉 小島久右衛門 五領田元太郎  
 後藤 龍縁 河野 順三 海老原清作  
 相田高八郎 青木 剛 赤羽 齊

謹告

(學報發送につきて)

拜啓月々發送の學報に對し轉居行先不明等の理由の下に返送せらるゝもの尠からず常に遺憾に存居候何卒御移轉の際は乍御手数迅速に御一報下され度願上候  
 又郵便事務の不完全なる爲めか御住所に何等變動なきにも不拘前同様の符箋付にて返戻せらるゝ例も尠からず候當方としては二回以上返送の場合は住所不明のものを見做し爾後學報の發送並に其の他の通信を中止致し居候間二月に亙り學報未着の際は郵便の事故に原因するものと御思召し早速御通知下され度願上候  
 九年度卒業生各位に對しては全部昨年十月原籍地に向け問合せを發し申候得共是又何等御返信なきもの及返戻と相成候もの尠からず是に對しては原籍地にも御不在のものを見做し學報の發送見合せ居り候間何卒至急御住所御通知下され度尙御移轉の際は其の都度御通知を煩はし申候  
 敬具  
 大正十年一月十日  
 早稻田大學校友會

溝口源太郎 水町喜一郎 宮下春一郎  
 清水忠次郎 白井 與一 紫 長衛  
 庄司 永成 重信雄三郎 重松 善一  
 雲雀與太郎 廣瀬正一郎 平野 履道  
 守 菊次郎 森 淺雄 森尾 繁春  
 森田 退藏 森田 美喬 森本 穰  
 瀬戸 介爾 鮮 干 全 須高 泰助  
 菅 周治 杉井 榮雄 鈴木勇太郎  
 鈴木 琢磨 鈴木 源一 藤井健治郎  
 井上 新一 市島 禎吉 岩田 武英  
 岩田 達夫 稻葉市郎右衛門 池田信太郎  
 細梅 三郎 土井市兵衛 吉堀 敬助  
 田上耕之助 田中 亮一 田内 盛嘉  
 高橋 惇 鷹野 三郎 堤 才三  
 中里 眞情 中島 卓爾 南 吉斗  
 村上 雄吉 村島 寬嗣 宇野 俊藏  
 宇佐 支雄 鶴原梅太郎 瓜生 卓爾  
 卜部 守之 上野 行藏 能任理佐久  
 野入利三郎 野村 重治 野間 俊作  
 久保田義三 來住 靜一 串本友三郎  
 矢富 宗介 矢野 義夫 矢野出龜之助  
 山泉 新 山田 支英 山田 定治  
 山添幸右衛門 山田馬城次 山口 博  
 山下 龜次 前田 久盛 前島 亮治  
 町田喜三郎 丸田 可平 丸山 傳  
 松岡清太郎 松浦和三郎 松浦縫之助  
 松倉照三郎 松山 德二 松本 文作  
 藤原覺三郎 藤沼 春吉 藤田 平逸  
 藤代三九三 古野 喬一 古谷 齋  
 深水龍太郎 福田 雄一 福田 復甫  
 福田 梅吉 福島 熊吉 小泉 政江  
 小林 頌雄 小林 恭助 兒島 御造  
 小林 暢 江村 正喜 櫻並 充造  
 寺田 善吉 相子 一郎 赤羽 佐一  
 東 與三二 佐藤 彌造 佐々木作三  
 齋藤 字八 阪 清之助 坂井 幸平  
 阪本 博亮 笹垣 俊海 木村 定爾  
 北浦 孝平 北山 一郎 三輪 方  
 三輪 笹市 御厨 善作 宮崎小八郎  
 島 徹則 島田 隆次 繁野 政瑞  
 澁谷 哲司 廣安 鹿夫 廣瀬 博  
 平瀬 信吉 久野洵之助 本山理太郎  
 望月 恒造 望月 重雄 森田 信一  
 妹尾富三郎 瀨田 壽一 關 善寶  
 仙波良太郎 菅沼 振一 鈴木 昇平  
 鈴木 豐 鈴木 茂德 伊藤喜代治  
 市島 齊 入澤 忠二 犬塚 秋彦  
 岩瀬 有一 石塚 與八 坂東 琢郎  
 堀野 眞一 近岡忠次郎 陳内 政雄  
 小野原初太郎 大宮英之助 貝原 揆一  
 河津 祐信 片山 昂 勝其百太郎  
 勝田 清忠 吉野 省一 谷村 賴尙  
 館岡斌太郎 館岡 幹 瀧田 誠  
 田中安太郎 中津海知幾 中村 忠雄  
 永井新一郎 長安富之助 村上 巧兒  
 村上 秀一 村越 齊 内田賢之助  
 氏原 正喜 漆原 雄象 上田 廉  
 能美 逸雄 野田 勝義 野崎 潔  
 工藤 啓策 栗林 宗參 草薙 健藏  
 藏野重太郎 矢吹三龜男 山尾 準一  
 山澤 俊夫 山崎 直治 山本篤一郎  
 前川 孝始 松島 謙一 松島輝三郎  
 牧田 二郎 牧山 耕藏 増田滋次郎  
 藤井 政八 藤吉 灌頂 藤野龜太郎  
 藤澤孝太郎 古瀬 政勝 深堀 政信  
 福田 重頼 福本清治郎 小西 利雄  
 小倉 重三 小竹 忠一 小島 禎治  
 河野 文乘 小林 啓邦 越川福太郎  
 青柳長次郎 秋元 定誓 佐藤 眞三  
 佐藤 眞憲 坂戸喜惣治 木村與一郎  
 木本圭一郎 北田 得策 菊地 三郎  
 岸川 德一 遊佐 敬事 三輪 俊治  
 三浦 順一 宮崎 篤臣 宮本 虎一

- 清水 貞祥 正司 常雄 庄司 夏則
- 島崎恒五郎 下村正太郎 下澤 重藏
- 肥田 獻策 廣瀬 秀圓 百萬 精三
- 本山 豐治 森川 入郎 森水隆太郎
- 關守 戶 千田 精一 須田 孝壽
- 杉下 有潤 菅岡德次郎 末澤 潤吉
- 杉 三郎 鈴木 白雲 井上 壽晴
- 井上育太郎 伊藤 市平 伊藤五郎右衛門
- 磯目 運喜 石井 孝一 花岡健之助
- 西尾 才助 大村 操 大角 幸次
- 岡田 貞治 岡山 秀平 香川 幸三
- 河北 警二 片倉 太志 寛 傳
- 神崎 要 吉見 周治 高木 献吉
- 武市 俊明 丹澤 保藏 曾根 長
- 中村 廣喜 中島 幹 永見泰四郎
- 長濱義太郎 宇野 新 植松 精一
- 野村 松三 久木田 司 中村 庶助
- 桑原 康雄 柳田 鐵三 山川 英藏
- 山田 忠吾 山崎 保 山崎 欽祐
- 山崎 九市 山本多三郎 山本 耘三
- 眞砂 新吉 松原 三郎 松原 常盤
- 松田 捨吉 松村 正治 松岡 啓一
- 牧 湊 牧元喜右衛門 横田 司朗
- 増田 環 増本幸之助 藤木 廣惠
- 古川 藤郎 古田 平隣 深野 憲見
- 小原 直治 小山雅太郎 小宮 義壽
- 小島 曜吉 近藤 貴徳 近藤吉太郎
- 江角 興義 阿部虎之助 味岡 昇三
- 青木 秀彦 赤羽 柳吉 佐藤徳一郎
- 佐藤 清吉 佐藤 美太 佐藤 鐵哉
- 眞弘 正興 北岡善之助 菊池 武
- 岸井 保 宮川貞次郎 柴田 政藏
- 篠原藏三郎 島川 進 島田硯之助
- 島津 需吉 島崎隆三郎 日笠 斐夫
- 平尾 康雄 土方 茂撫 望月彌九郎
- 關口 賢三 關本 雅亮 須藤 瀧丸

謹告

(校友會員名簿につきて)

拜啓 陳者大正九年度名簿に對し編纂方御問合の向も有之候が右は業に端書刷にて御通知申上候通り九年度名簿は八年度名簿に對する修正増補に有之即ち既往一ヶ年間に御住所職業の異動を生ぜし方々のみを修正として収録し更に九年度卒業生を増補として編纂致し候ものに御座候隨つて九年度名簿に登載せざる方々は八年度名簿と何等變動無きものに有之除名若くは死亡等の儀に無之候間右に御了承の程願上候

九年度に限り右様の形式を執りし次第は物價騰貴は依然たる有様にて諸出支は只嵩むのみに有之又一方には前年の經費不足を填補せざるべからざる事情に迫まり居り候場合己む得ず經費節約の非常手段として幹事會の議に基き如上の編纂法を執りし次第に御座候 兩年度の名簿を併用することの御不便は勿論の儀と存候得へ共右様の事情御諒察下され今一年丈の御不便を御忍び下され候様願上候 敬具

大正十年一月十日

早稻田大學校友會

二仲大正九年度維持費齎出者に對しては十二月廿三日迄に九年度名簿の發送を了し候處年末郵便物輻湊の爲めか住所不明等の符箋付にて返戻せるものも數々有之候如上の次第に付未着の方には其旨御一報下され度願上候

- 石 原謙 服部文四郎 帆足理一郎
- ベニツボ、本多淺治郎 片山 利久
- 克彦 吉田源次郎 高桑 駒吉
- 今 和三郎 江藤 三三
- 山本 勇三 松岡 義正 牧野菊、助
- 小林丑三郎 古賀 光太 小穴 秀一
- 江藤 三三 コエツチユ、ス

- 阿部 良夫 三枝 守富 北浦 重之
- 二上 兵治 宮井 安吉 鈴木喜三郎
- 井上 仁 稻津 秀光 井關十二郎
- 伊藤農夫雄 伊藤 嘉平 伊藤 博文
- 伊澤 茂禮 岩井樹太郎 岩川捷三郎
- 板谷 眞吉 稻垣泰之助 猪瀬 美計
- 池田武次郎 池内恭三郎 石井久太郎
- 石井 政吉 石井 新一 石井 壽
- 石井 衛太 石原 修吉 石尾信太郎
- 石橋鑑太郎 石川 洗 石川藤一郎
- 石田 文治 石田賢一郎 波津久清
- 馬場定四郎 馬場 恒吾 馬場勝次郎
- 八田 俊吉 原 安三郎 原 達平
- 原田 雄門 濱口 麟藏 西脇六郎右衛門
- 西川光次郎 西川善太郎 西村 清一
- 翠田 正由 堀切善次郎 星野 治作
- 別宮音五郎 富田逸二郎 戸田徳之助
- 戸塚善次郎 鳥居 靈吉 鳥山 悌成
- 東郷 彪 富永 三省 知野根好雄
- 中條良三郎 小川兼四郎 小野友次郎
- 小野 俊三 大川 入郎 御笠原長至
- 老川九十九 大井派太郎 夫場 運次
- 大原 晴雄 大橋 福松 大橋 誠一
- 大橋弘之助 大津山丑松 大山 郁夫
- 大江乙亥門 大森 啓介 大森 喜六
- 大瀨 其一 太神 壽吉 太田 永吉
- 岡田 虎雄 太田 稠夫 岡見 謙吉
- 岡見 慎二 岡木駒之助 奥田 喜藏
- 恩田 恒男 奥田 雲藏 荻島 遠
- 荻野元太郎 和田 利彦 若林 成昭
- 若林 亮 渡邊 彌生 渡邊善次郎
- 渡邊勝太郎 渡邊幾次郎 渡邊 修三
- 渡邊 民平 渡邊 虎一 加藤 幸吉
- 加藤敬三郎 加藤 景福 加藤 清忠
- 川合 政雄 川添 恭造 川村 三郎
- 川久保 正 川越 喜義 川島 剛一

- 河原 三郎 片谷 傳造 勝 勉
- 金津 熊夫 金子 馬治 龜井 壽平
- 上藤 武治 上野 三郎 上村 通
- 柏房 吾 柏木 潤三 神谷 信義
- 横井 順造 横尾 清 横山 有鏡
- 横山源次郎 吉川 仙藏 吉田 謙二
- 吉田 秀人 吉田嘉市郎 吉田 巖
- 吉田 春夫 吉本 正也 田原録之助
- 武衛 義治 田邊虎三郎 田中四郎左衛門
- 田中 秀穂 田中 保男 田中 周衛
- 田村 金宣 田澤 康民 立花 寛篤
- 立花 隆藏 高井 正明 高橋敏太郎
- 高橋美三松 高橋 一 高橋 三郎
- 高知尾誠吉 高津 季政 高白 真郎
- 高野 辰郎 高木宇三郎 高木 岩吉
- 高木 武夫 高木八太郎 高木 幸三
- 鷹見久太郎 種村 宗八 竹内 熊吉
- 竹田 茂 竹内 謙六 竹本 曜二
- 瀧 清 檀廣 樂 相馬 愛藏
- 拓植 曄 坪内 信 鶴見 勇
- 塚越孝次郎 網島 堯 筑紫 宮雄
- 粒良誠一郎 辻 穰 辻 千三郎
- 名取 夏司 名取 堯 中村 進午
- 中村 芳雄 中原 眞一 中川 重政
- 中川 末吉 中根 正俗 中村 萬吉
- 中村 有一 中野 鐵平 中野 正剛
- 中野 泰助 中山 好次 中山 本慶
- 中桐確太郎 中宮 五一 中島利一郎
- 中島 毅一 中木 眞一 長尾 文雄
- 長尾精一郎 長野小伊三郎 長澤 龜吉
- 武者 金吉 向山 茂次 向井 兼徳
- 村井清太郎 村上 松藏 村上 謙吉
- 村崎之助 田川清兵衛 佐美占太郎
- 上原吉太郎 内田七郎治 内田 民部
- 内田 喜一 上野 景明 浦邊 襄夫
- 生方 眞一 植村 與平 梅津 庸

梅澤 忠治	野村 貞太郎	野崎 貞逸	久能木 誠一	倉 正榮	矢島 戒謙	山形 吉太郎	山口 直平	山本 昇雄	山本 謙太郎	安田 忠雄	松葉 榮	松平 賴壽	松野 徹	松島 音松	松本 傳一	藤井 英造	古谷 奴二	福地 福次	古谷 野喜三郎	瀧田 忠良	小出 隆	小林 正勝	小林 植	小寺 敬孝	向後 順一郎	近藤 鐵三郎	江島 憲	寺岡 素	田 篤	青江 隆二	荒木 孝平	綾部 幸夫																			
薄田 貞敬	野口 次郎	久保 義美	久米伊豫太郎	倉島 一郎	柳生 金治	山田 道元	山口 達	山本 信敬	山瀬 俊賢	町田 岐	松尾保三郎	松永安衛	松山 忠二	松本 軍平	牧真 言	藤田 耕平	深井 英男	福田 龍一	福島 義夫	小池 毅	小林利十郎	小林岩次郎	小松 正雄	小島 七郎	好地昇之助	江原 憲吉	圓城者松一	寺田 正	有江金太郎	青木 俊明	新井智三郎	天海丘四郎																			
宇佐美佳治	野間 五造	久保 次郎	邦武	八橋徳次郎	山路虎之助	山田末一郎	山口 萬吉	山本 憲太	安田 清雄	松井淺次郎	松田 清	松永 弘人	松山 二郎	松本 敬治	牧野 輝智	藤村勉次郎	舟曳 李助	福田徳太郎	富士雄四郎	小出範治郎	小林登志吉	小松 正雄	後藤 曠二	肥塚 駿一	江上 弘遠	遠藤 敏	寺木 定芳	青地雄太郎	朝倉 龜三	天野 竜齋																					
淺川 是勝	安達 和雄	安西於菟彦	佐原竹次郎	佐藤 善郎	佐藤勝太郎	佐々木謙邦	齋藤時之助	齋藤邦治郎	酒井 醇一	櫻井兵五郎	鯨島 武二	木口 重彦	岸 孝一郎	三浦 弘一	三宅 淳平	湊 眞五郎	宮武 蜂次	宮崎八百吉	清水 八郎	篠田辰之助	瀧澤壽三郎	下條 親雄	平澤 藤八	平松 市藏	守屋 福市	森田 明義	百瀬 善重	關口 盛一	善野孝一郎	杉原 敏一	鈴木 寅彦	鈴木 祐彦	鈴木 新吉																		
秋元 平八	安藤 仁隆	安西計太郎	佐藤 渾	佐藤 正	佐立 忠雄	榎谷 繁一	齋藤 舜榜	坂齋 道一	堺田 顯次	櫻井 友造	木村 大見	紀 淑雄	北川 博	三浦 嘉重	三澤 正作	宮垣龜之助	宮山 勝	宮崎宗二郎	柴谷 龍寛	島津 久賢	下田 基治	親 平	平塚 泉三	平塚 繁信	森 盛一郎	森田 音由	武 瀨下	關谷繁太郎	須藤 隆治	杉江 敏雄	鈴木 素	鈴木 音次																			
伊人	金平	賢智	是勝	碧	長作	齋藤 謙太郎	齋藤 惠唯	坂本 三郎	相良 常雄	行 慧	木村賢三郎	清原 秋彦	湯淺益三郎	三吉友之輔	相田 辰雄	水崎 保	宮田 修	宮澤 恭亮	志賀茂次郎	上甲保一郎	繁野 珠城	下村 正治	平塚 大	秀島英五郎	春吉	繁雄	清通	仙臺若太郎	嘉男	杉森孝次郎	鈴木 治三郎	鈴木 音次																			
井野 豊一	原田 榮三郎	小田 岩藏	大岩 寛	葛城 正盛	田村 直記	中島 三郎	内々崎真平	久米田正之助	國貞 裕二	柳澤 憲一	松井 敬三	松田 種三	藤井 周一	古橋 林司	福田秀太郎	小柳 精藏	近藤 博	佐賀 七郎	櫻井 京造	柴田 珍	平岡 敬藏	鈴木 宗吉	井戸 清文	岩村 成中	播磨 昌辰	西條 教部	小佐野 審	谷 徹六	中村 節雄	植木 信一	野田 總八	黑河内義夫	熊木 捨治	矢野治之助																	
石黒 定美	早野芳三郎	尾崎 孝吉	大山國太郎	與那城清信	中村 正司	中本隆太郎	内野 徳三	空閑知鸞治	熊已 義憲	山田 正	松尾榮三郎	松村 謙三	藤田 權三郎	福井 雄三	小林達四郎	小寺 泰	秋山 正平	佐々木常記	南 慶治郎	島谷 清見	平山 智眼	鈴木才治郎	井上 繁治	逸木 盛照	原 茂吉	小野 楠一	渡邊供一期	高木七五郎	棟居 武夫	梅田 久芳	黑田 立毛	草野 清	山岡醇一郎																		
春名 成章	橋田 肇	折井 行江	河町 國助	田中鎌次郎	中村恭一郎	永見 專一	植野謙次郎	黒木 清介	矢田部健次郎	山田 縁郎	松田 峯藏	正木 新	藤本作太郎	福富 正喜	小林友太郎	神津 甚平	近藤猪三郎	坂本 信道	清水 隆	廣瀬 恭	森田 正光	井上 竹雄	岩佐 喬一	長谷川藤橋	武雄	河崎外次郎	竹岡 陽一	内田忠次郎	上田 響雄	工藤與次郎	熊井 晴雄	矢水 務	山内 千松																		
松浦 三平	增田稻三郎	小川愛二郎	小林助次郎	河野 智精	赤塚彌太郎	佐藤 昇平	木下豊太郎	三森 以正	平賀 文男	須永 俊三	井川 金助	伊藤重治郎	磯部 眞雄	林 矣末夫	新屋 茂樹	鳥居 武	大久保 寛	若杉 勇	勝又 敏彦	風間 忠任	高信 孝治	竹下浦次郎	南 忠照	宇山 忠松	内山 慶一	浮田 秀樹	日下 武近	桑原己代治	國分 義一	山本 秀秀	丸山 盛雄	松尾千大夫	松隈 一																		
松久 利一	船渡 佐輔	小針 六郎	小林 正義	近藤 壽福	淺口 秀多	澤野 好三	記録 萬作	清水忠四郎	元島 善三	松原美佐雄	井上 静樹	稻富 秋吉	出雲井忠朗	羽場美登志	堀部久太郎	小汀 利得	大森 榮治	渡邊 善吉	金子 智	田中 只江	竹内順三郎	中田 富男	難波又四郎	馬野 精一	慶一 氏家	野瀬市太郎	黒瀧寅之助	倉持 光壽	矢田部三四小田	山本 巳四治	眞鍋金次郎	丸山 肇	松岡 益雄	松平 英																	
清	福田 勝弘	小林 定脩	河野 健吉	江野島正雄	佐原 武雄	堺田 錦十郎	金 鎔	獅子内護一郎	武夫	鈴木 新吾	井上 誠一	稻垣升一郎	八田安之助	橋田 裕磨	鳥海 武夫	大村 清	儀一	片山 重平	鎌田 要助	谷口辭三郎	竹内角左衛門	中村 鶴	村上 元吉	内山 義文	下部 退三	久保木信次	黒木要太郎	熊澤龍太郎	熊澤龍太郎	山本巳四治	眞鍋金次郎	松井 肇	松平 英																		
藤井 昌太	藤野 善吉	小池 正雄	洋吉 小林	秀三 小林	小寺 融吉	遠藤 周藏	赤石 定藏	佐藤 金次	齋藤 忠助	木塚 半三	金淵 禮	宮野 昭章	島津 忠文	平澤 三郎	森丘 正唯	關 宗次郎	杉田 米吉	鈴木 貫吉	伊原 全郎	今井 幸吉	石田 重利	澁貴 宗一	小川 幸衛	大橋兼次郎	岡本 政平	藤井 秀一	藤澤鹿太郎	小原 正之	小林 正美	小西 秀三	小寺 融吉	丸山 肇	松岡 益雄	松平 英																	
藤井 秀一	藤澤鹿太郎	小原 正之	小林 正美	小松重次郎	兒島 茂助	青木 咲吉	雨宮 敬作	佐々木清右衛門	眞田 亘	木島 光治	峯崎 晃忠	嘉那 嘉那	平田 護衛	森 治作	森安綱太郎	末松健太郎	角義 道	土屋 啓造	稻荷義太郎	石塚 三郎	初谷嘉一郎	地主 武治	小栗政治郎	岡崎 賢次	和田 捨松	藤井 秀一	藤澤鹿太郎	小原 正之	小林 正美	小松重次郎	兒島 茂助	青木 咲吉	雨宮 敬作	佐々木清右衛門	眞田 亘	木島 光治	峯崎 晃忠	嘉那 嘉那	平田 護衛	森 治作	森安綱太郎	末松健太郎	角義 道	土屋 啓造	稻荷義太郎	石塚 三郎	初谷嘉一郎	地主 武治	小栗政治郎	岡崎 賢次	和田 捨松

大正十年一月十日印刷  
 大正十年一月十日發行  
 東京市牛込區白銀町二十九番地  
 三十五號

編輯兼發行人 前田 多藏  
 東京市牛込區櫻町七番地  
 印刷者 渡邊八太郎  
 東京市牛込區櫻町七番地  
 印刷所 日清印刷株式會社  
 府下豐多摩郡戶塚町字下戸六番地  
 四十七番地  
 早稻田大學  
 發行 所早稻田大學校友會

新正に際し謹て御健康を祝し倍奮  
の御厚誼を希ふ

大正十年一月元旦

學長	平沼淑郎
理事	松平頼壽
理事	淺野應輔
理事	鹽澤昌貞
理事	田中穂積
幹事	前田多藏

# 恭賀新年

大正十年一月元旦

早稻田大學  
高等師範部教授講師一同  
高等師範部卒業生諸賢

# 謹賀新正

大正十年一月元旦

早稻田大學校友會  
校友各位

## 社交界の稱揚



健康の素なるカルシウムと甘露味「サルピス」を合成醸成せるものでメロンやマンゴステンの様な風味を持てゐる四季の強壯飲料

カルピスは奇しき力を人に置く  
新しき世の健康のため

與謝野品子

樓詰は酒屋藥屋食料品の店々にコ  
ツプ賣は三越其他の有名食堂に

小 一圓六十錢  
大 一圓六十錢

製造元 東京日本橋分商店  
株式會社 一トク

## 特約販賣所

## 高田牧舍食堂

早稻田大學御用  
大學正門前

電話二九九四番

# 最も進歩せる電球!

## 其使用者は榮ゆ! 何故?

電量が非常に經濟で、而も  
燭力が非常に強いから、  
店の活動能率が非常  
に高まる。



三越、白木、松坂屋、吳服店  
帝國ホテル、精養軒  
丸善書店、  
外數百軒御採用



### マツダ

シ (瓦斯封入) 電球

專賣特許廿二個領有

神奈川 藤川町  
東京 東京電氣株式会社  
大阪 大阪市西區阿波橋一丁目  
門司 門司市西本町三ノ二九  
東京 東京市神田、名古屋、仙臺、札幌、大連、上海

此切取を添へて  
御照會の方  
へは説明  
書願呈

# 英文商業叢書

東京帝國大學教師 エッチ、エフ、ブレイ氏著

**英文商業書式**

Facsimile Commercial Documents.

郵定價金五十四種錢八拾錢

同氏著

**英文商業通信**

Commercial Composition & Correspondence.

郵定價金六拾七錢

富田源太郎氏著

**英和商賣用會話**

郵定價金四拾六錢

同氏著

**英和商賣用信書上編**

郵定價金四拾八錢

學習院教師リチャード、ヘヤロー、ロース氏共著

**實用英語會話**

Practical Conversation in English & Japanese.

郵定價金四拾貳錢

小柳津邦太氏著

**商用略語字彙**

A Dictionary of Abbreviations and Contractions.

郵定價金四拾八錢

千金真宗三郎氏著

**英文最近銀行通信**

Modern Correspondence in Banking.

郵定價金四拾貳錢

英國商業雜誌社編

**英文輸出貿易之研究**

Studies in Export Trade.

郵定價金六拾七錢

今井友次郎氏著

**英文今實踐商業通信**

Practical Commercial Correspondence.

郵定價金四拾七錢

同氏著

**英文外取引通信實例**

Direct Dealing.

郵定價金四拾貳錢

同氏著

**英文初等商業實踐**

Primer of Business Practice.

郵定價金四拾貳錢

同氏著

**英文高等商業實踐**

Advanced Business Practice.

郵定價金四拾八錢

東京 大橋 三條 (番三七一 大橋區)  
 神戶 橋心 阪大 (番四七 阪大區)  
 田原 橋心 阪大 (番六一八 二京東區)  
 駿河 橋心 阪大 (番四七 阪大區)  
 河津 橋心 阪大 (番四七 阪大區)  
 下田 橋心 阪大 (番六一八 二京東區)

東京 本橋 (番五 京東區)  
 日本橋 (番五 京東區)  
 東京 本橋 (番五 京東區)

橫濱 濱田 仙臺 (番五一 仙臺區)  
 神戶 橋心 阪大 (番四七 阪大區)  
 大阪 橋心 阪大 (番四七 阪大區)  
 東京 大橋 三條 (番三七一 大橋區)

丸善株式會社

顔のアシメ

# カステイ石鹸

クラブ白粉  
本店特製品

顔のアシメの  
家庭石鹸



